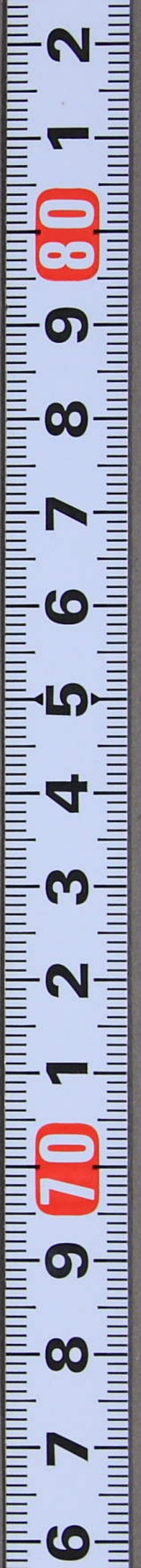




明治  
才媛  
詩集  
新編

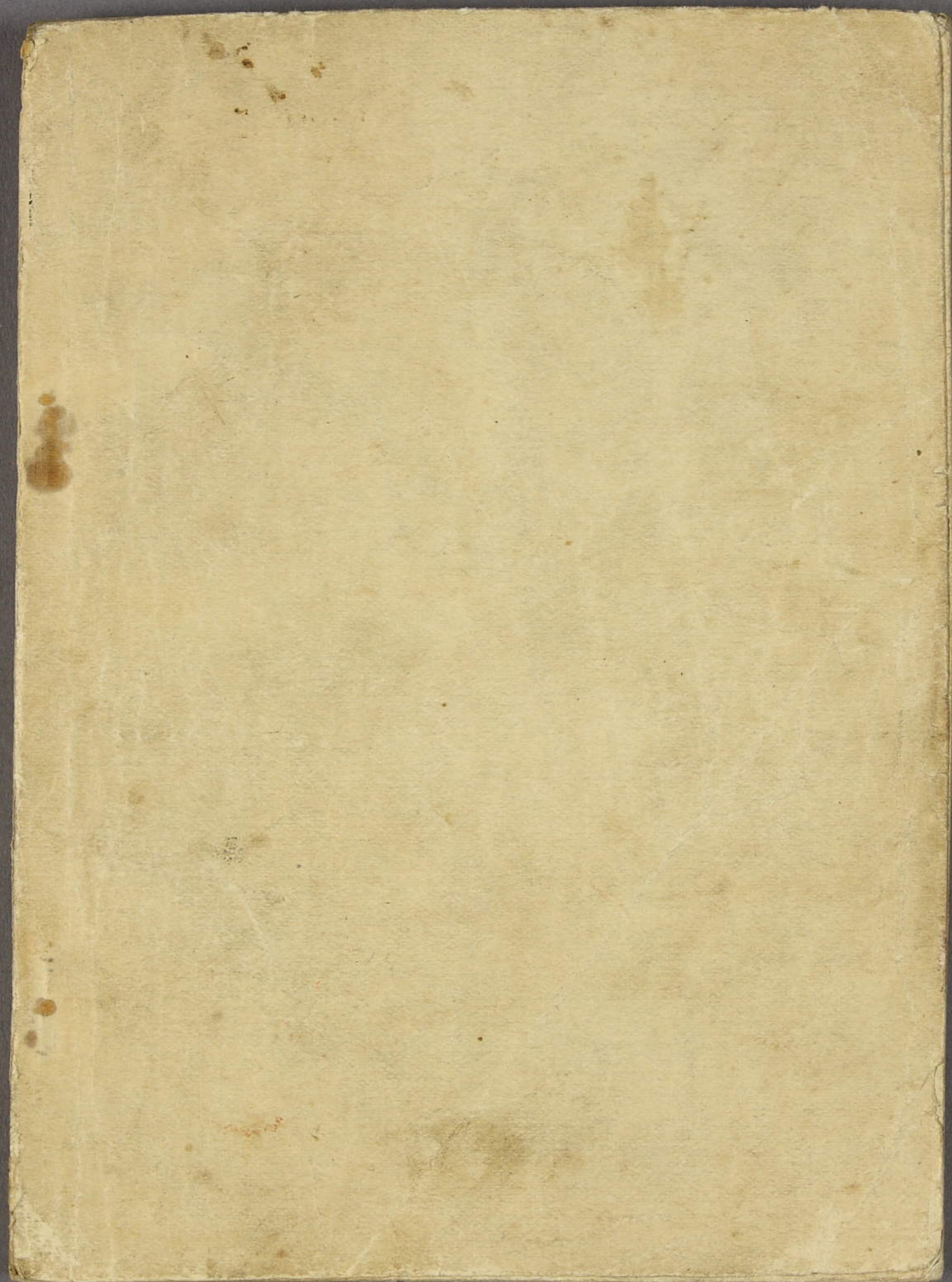
新編才媛詩集













丸山松廬君  
 小森松風君  
 平井晚村君  
 河井咀華君  
 谷江風君  
 沼田笠峰君  
 揖斐紫樓君  
 合評

明治  
 媛治  
**新體詩第一集**

發兌  
 文友社



君はやさしき堇草、われは姫桃ことごとくに、  
なほ春野に生ひ立ちて、色に榮ある名をわむ  
と、今日しもみ手をかはしけり。訪ひくる蝶に  
宿かして、夢の行方を見まもれば、うれしき歌  
の春の譜も、もるゝとばかりほゝゑめる。……  
春なれや、今日世に咲ける花の香を、常世のま  
まに匂はしめむことをこそ。

作者にかはりて詩集のはじめに

竹香しるす



明治新體詩第一集

目次

宇品の朝(出征の夫を送りて).....	石見齋川嘉女子
君がかひな.....	東京鈴木吟子
戦死者をしのびて.....	神奈川永島篤子
嗚呼秋は來ぬ.....	鳥取天野清子
題知らず.....	山梨小林まつよ
董の歌へる歌.....	東京重田春子
逍遙.....	程ヶ谷須山規矩子



人の心……………甲府 塙 よし子  
 我兄……………久留米 筑 紫 子  
 水の流……………尾道 野田 つや子  
 松下泉……………熊本 谷岡 たつ子  
 野戦病院……………麴町 森田 松南  
 秋の聲……………尾道 橋本 東洋子  
 人形……………横濱 寺田 光子  
 古戦場……………伊勢 伴 きん子  
 亂調……………長崎 落 葉 子  
 旅順の戦に兄上の討死し給ひしを…福井 長谷川 静子

夏の雲……………東京 嵯峨 すみ子  
 孤兒……………東京 佐藤 深雪子  
 戦場の弟より玉章に野菊一輪巻きこめて  
 贈り越しければ……………備中 大西 益子  
 亡妹を忍ぶ……………大隅 山崎 登代子  
 捨小舟……………日本橋 し づ 子  
 降雨吟……………長崎 江上 順子  
 れくつさどころ……………名古屋 青木 穠子  
 松下泉……………神戸 鈴木 まさ子  
 疑心(英詩和譯)……………越後 岩本 よし子



師に訣る……………伊勢宮崎道子  
 憐れの少女……………伊豫大久保春枝  
 かざしの音……………岩手北條文子  
 渡守……………土佐榮田多稻子  
 萩桔梗……………東京今ひさ子  
 天長節……………神田小林操子  
 試筆……………山口久保思雨子  
 學校……………静岡古見薰子  
 戦利品……………麴町高橋つる子  
 萩桔梗……………高知高橋ゆき子

かざし……………千葉堀内ふく子  
 都落……………高知公文益枝  
 歌筆に寄す……………神田瀬沼浪花  
 虹……………長野市村とく子  
 渡守……………信濃成澤きね子  
 天長節……………麴町高關すゞ子  
 亡友を偲びて……………本郷辻岡かへで  
 野菊……………久留米黒岩春子  
 夕づゝ……………信州撫子  
 浮世のさが……………越中浅田こと子



白菊の賦……………尾道有元光子  
 平和……………秋田宗形ふみえ子  
 古戰場……………静岡岡長谷川瑞枝  
 胡蝶の夢……………長野入江孤舟  
 行く春……………東京林つた子  
 新年……………東京稚野榮子  
 夜半の夢……………東京ほなみ女史  
 新年の海……………大阪岡秋子  
 草笛……………東京石原露子  
 あはれ君……………薩摩中島竹子

勇士の妻……………麴町森田孤芳  
 天長節……………久留米藤岡花子  
 渡守……………高知竹村義子  
 銃獵……………東京篠田けごろも  
 ゆく春……………広島和知廣子  
 夕川……………信濃玉村高子  
 遊子……………栃木黒澤宗子  
 ゆく春……………丹後栗山陶子  
 夜半の鐘……………大阪盛田せい子  
 蛇……………土佐秋月廣江子



渡守……………	信濃上田桂子
折にふれて……………	山梨松葉
運命の子……………	大阪池田静子
戦利品……………	麴町加藤安子
納豆賣……………	小石川稻吉貞子

明治才媛新體詩第一集

田部井竹香選

宇品の朝

(出征の夫を送りて)

石見國美濃郡 齋川嘉女子

曉つぐる鐘の音に  
朝日の光さすところ  
宇品の海の雄々しさよ

彩雲消わてはがらく  
浪金色によせかへる



沖邊はるかにうす煙  
汽笛の音も勇ましく  
軍馬いなしく聲高し

なびけてならぶ船數隻  
砲車のひらきといろきて

島山松も夢さめて  
戎衣ふかせて今はしも  
征途につくかあゝ君よ

しうかに送る朝かせに  
浪路はるく艦うけて

よわきをねらふ荒鷲の  
義憤に起ちし御軍の  
神の冥助のなからめや

さらき息吹に堪へかねて  
向ふ處にいかでかは

仇なす敵のあと断ちて  
日の大御旗かゝりやかし  
はぐべき時はやがて來む

彼の遼陽にハルピンに  
我が大君の萬代を

たささらば君よ幸くませ  
あした飾らむ花の數  
榮ある君を待つべきに

やがて樂しき凱旋の  
今よりさはに培ひて

松風曰

清澹の想、典雅の調。最後の一節は殊に惋惜。凱旋のあしたに飾らむ花束の料にぞ、培ひ給ふその花よ。榮ある色に匂ひてあらんかし。あはれ優しき詞の中に、報國の丹心もほの見ゆて。

匪華曰

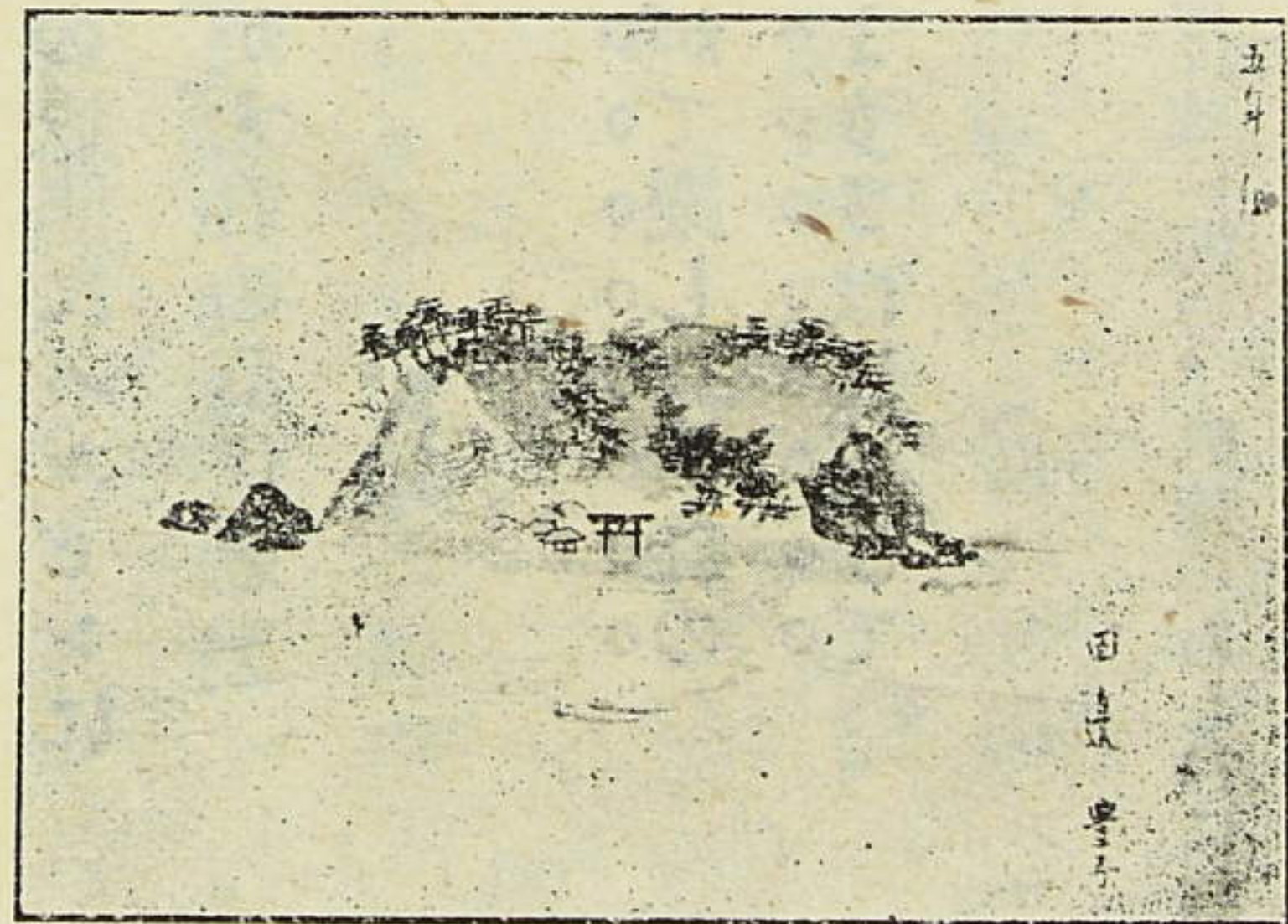
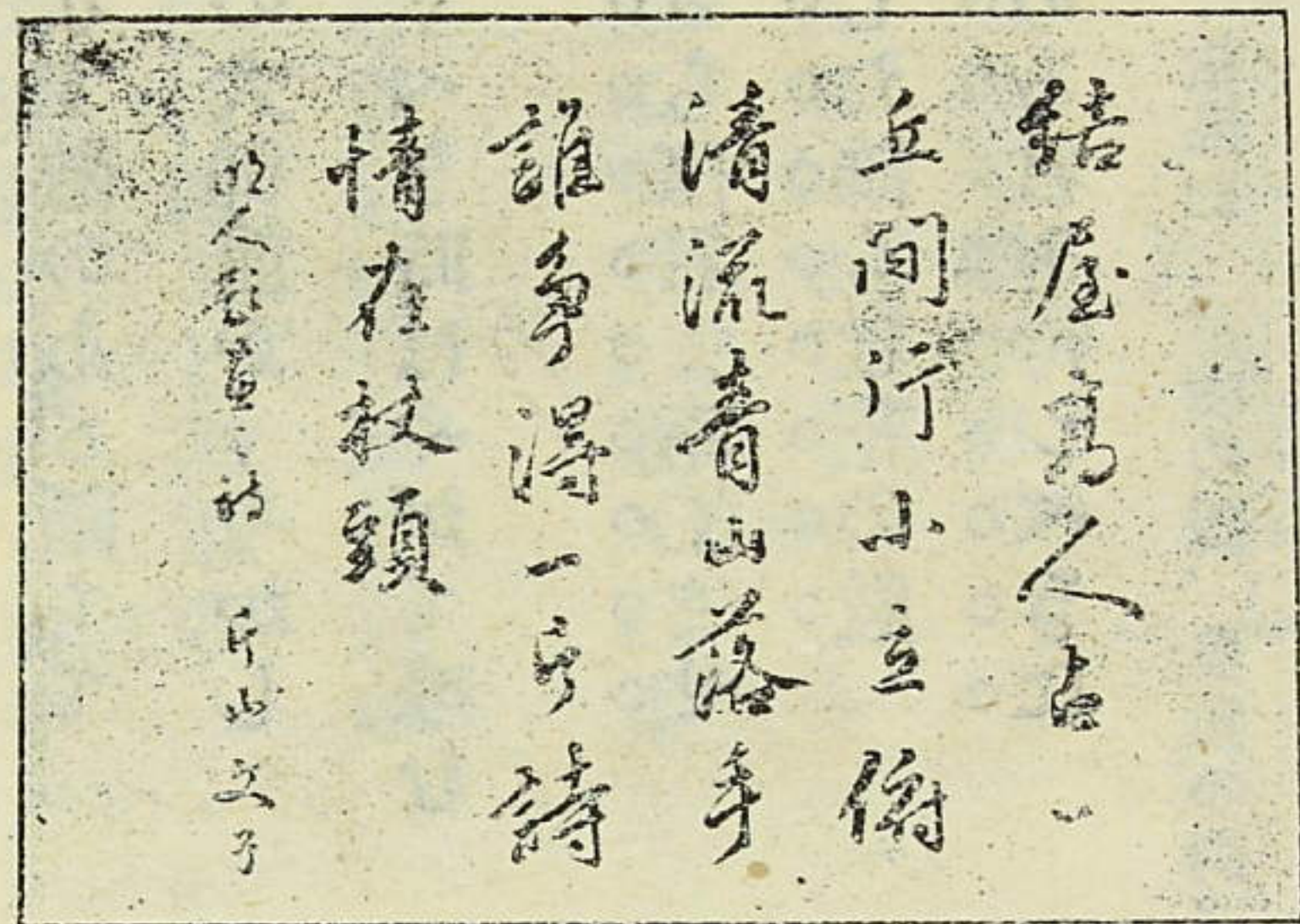
眞情、筆に勝つの詩。

笠峰曰

前半は寧ろ平凡なり。「あした飾らむ花の數」の一句を愛づ。



東 鈴  
京 吟  
子 木



紫樓曰 さらたて、云ふ所なし。只女の詩としてや、見るべきものならむかし。  
松廬曰 字品の出船はおのれも一たびこゝろみたり。第三段よく歌へり。



君がかひな

東京 鈴木吟子

仰げば高き大空に

浮ふや花の雲萬朶

望めばひろき長江に

流れてゆるぐ水千里

あゝ我希望にあこがれて

いざよふ雲に行く水に

理想ゑがきし其かみの

まよひを今は悟るかな

見よ浮き雲の彩あるも

ながるゝ水の韻あるも

行方しいれぬかげにして

信實まことは何に求めんや

いま世の榮華もたねごも

愛の血汐のあたゝかき

君が腕にわれはよらまじ

榮舟曰 幽艶清綺、情甚だ深し。

江風曰 若き人の何に迷ふか、世に迷へるもの多しとかや、さりとは又幸

多き君にもあるかな、あはれかくて長へにこそぞ。

笠峰曰 どこさほなく我れはこの詩を愛し好む。但し初め四句大に誦すべ

くして、終り三句氣障りなり。

晩村曰 花曆くりかへす日の憂をのべてつくる處なし。

戦死者をしのびて

神奈川縣 久良岐郡金澤 永島篤子

まぢまぢし

遼陽城はれちいりぬ

都下百萬の民くさは

かちし軍にゑひぬれど

萬歳歡呼の聲のうち

脊子失ひしわかき妻

父失ひしみどり子の



あかどしらすや世の人よ。

君のため

國のためにと譽れある

花のこゝろは床しきも

心には似ぬ涙のみ

ささましき

みいくさ語りきくたびに

とる手おろしと開きみて

便りもなくて物たらぬ

すぐる思へば哀れげに

戦いくさのにはに散りはてし

朽ちぬほまれはうれしきも

ま袖の上にちりかいる。

うれしかりしを君かふみ

嬉しかりしを今ははた

心地しつゝも今日までに

あゝげに君はなき人か。

鶏林の

北のあら驚つばさなほ

金鷄勳章胸間に

金鷄のひかりとことばに

青史の上をやてらすらん。

かちどきあぐる其時よ

かざらん君はおはさねご

ちしほはへある芳名は

松風曰 名譽の戦死者を忍びての一篇いと哀なり。その忠魂はなほ遼陽附近をさまよひてやあらんかし。

咀華曰 美しき詩、

紫樓曰 「金鷄勳章胸間に」は詩の格調を無視したる十膽？ 平凡？ の失作、されど至情は見るに足る。

松廬主人曰 彈丸に倒れ、刃に伏し、病に斃る、武士の父母はた妻子、此の同情の涙ありて始めて哀情を節し得べし。戀狂などのいたづらがきにまさる數等。



鳥 天  
取 清 野 子



嗚呼秋は來ぬ

鳥取市 天野清子

小○雨○ふ○り○  
旅○の○や○ど○  
秋○か○せ○は○  
さ○と○散○り○し○  
た○も○ひ○で○は○  
雲○へ○だ○つ○  
行○く○所○  
か○い○や○け○る○  
ど○も○し○火○淡○き○  
古○き○詩○誦○せ○ば○  
山○よ○り○出○で○つ○  
桐○の○一○葉○に○  
潮○と○湧○き○て○  
故○里○こ○ひ○し○  
望○に○み○ち○て○  
青○山○あ○ら○と○

長松風入漱雲  
清光鶴雛栗刷  
羽毛夜半道入  
騎過海一輪秋  
月碧天高



うたひつゝい。すてし故山よ。

たらちねよ、 嗚呼我友よ

花ぞのよ あゝ谷川よ

よぼろしは 目に浮び來つ。

そいろにも 思、走すれば

秋の香は ひしとせまりて

この胸を わないかいひる。

小雨ふり ともし火淡さ

旅のやど 古き詩誦せば

風にのりて 「あゝ秋は來ぬ」



松風曰 一葉散つて秋風幽韻あり。人として誰か故園を思ふ情なからんや。

情景凄絶、詩趣豊饒。

匪華曰 巧みなる辭、暢やかなる調、一絃辭れず、二絃整ふ。「風にのりてあゝ秋は來ぬ」三誦すべし。

笠峰曰 青春のいぞみ、一葉落つる秋の夕に何のうらみぞ。作者亦我れと境遇を同うするものならむか。「旅のやど、古き詩誦せば」さながらに、通ふ心の末も遠しや。

又曰く 七五調に飽きたる目には、何さなう棄てがたき調なり。

紫樞曰 「秋は來ぬ」の一篇、集中の尤なるもの。想高く調なだらかに、しかも筆致輕妙、三誦するに足る。初聯最もよし。

晚村曰 「行く處……すてし故山よ」の一聯、この篇中尤もさゝのひたる情ある趣あるものと思はる。調は若竹の風の如く、想は一ひら雲の野末にのこれるが如し。誦すべし。

松廬主人曰 やゝ詩趣あり。たゞし誦せるは如何なる詩か。きかまほしや。



題 しらす

山梨縣 東山梨郡松里村

小林まつよ

たゞ手弱女よはした女と  
 婦女子たりともいかでかは  
 何の功かたてざらん  
 相摸太郎や豊太閤  
 弘法大師も生みたりし  
 二十八萬噸の船艦を  
 みなるのかみの婦女子なり

ないがしろには云ふなかれ  
 君がみ爲とならざらむ  
 同じく婦女子と云ひながら  
 親鸞上人あるは又  
 十有五萬の常備軍  
 造りし國の母親も  
 遠き歴史をかぞふれば

かしこき神功皇后は  
 韓山までも攻め入りて  
 示したまへるみいさをや  
 弓弦ならし諸敵を  
 阿茶局に致賀媛  
 巴御前に大姿など  
 忠勇烈婦の人々を  
 豈男子のみに限らんや  
 手弱き身にもなかくに  
 卑めらるゝ理あらんや

八重の浪路を越へ渡り  
 國威を遠く海外に  
 形名の妻はけなげにも  
 打しづめたる烈婦ぞや  
 松平禪尼、尼將軍  
 我が日の本に名も高き  
 かぞへ擧ぐれば尙多し  
 國家につくす真心は  
 山を引さぬく力あり  
 世の姫君よ奮ひ起て



今や東亞の天くらく

戦雲棚引く時なれば

島のみ國は女子出で、

つきなん限り守らなん

男の子皆征け露の野に

荒ぶる鶯や醜草を

刈りつくしてぞ斃るべき

男の子皆征け露の野に

島のみ國は女子出で、

つきなん限り守らなん。

松風曰

海國女子の意氣豪莊天を衝く。日本婦人たるもの國家の危急に際

しては、須くこの決心なかるべからず。爲めに腕鳴り、忠魂飛ん

で、更に勇氣の百倍するものあらん。末段最も余が意を得たり。

阻華曰

壯んなりや氣焰、但し詩は平凡拙劣なり。

紫樓曰

阻華兄の言の外なし。

堇のうたへる歌

東京麴町區  
飯田町六ノ一〇

重田春子

若くさもゆる春の野を

ゆるく流るゝさゝ川に

影を映してほゝるめる

我や岸邊のすみれぐさ。

霞をうかべ日をまねく

野邊に生ひては情ある

胡蝶のきみに宿かして

夢多かりしわが身かな。

かすみにはほふ朝日影

やよひなかばの花影に

なさけあふるゝ物語り

聞きて笑みしも幾度ぞ。

我花びらは小さけれど

心をこめし佐保ひめの



これぞかざしの花模様

見ませな色のこむら咲

夕べ消ゆゆく虹の輪の

はか無よりもつれ無は

噫東の間の系にしにて

胡蝶の君はかへり來ず

岸にさゝやき流れゆく

小川の水にことゝへば

いらへは無て契りにし

蝶の羽袖ぞかた見なる

おもはずぬるゝわが袂

露を頼みの身を持てば

やかてしぼまん花の笑

あゝ野にちさき螢ぐさ

さらば契りし白たへの

蝶の羽袖に打ちのりて

龍の宮居をおとづれて

海の女神とかたらはむ

松風曰 詞調洗練、凡手の及ぶ所にあらず。君が才筆に載せられたる葦の

面目まで思ひ合されて。敬服々々。

咀華曰 優婉高雅。恐らく集中の精。

竹香曰 君猶妙齡。而して此の奇想才筆あり、實に後生恐るべき哉。

紫樓曰 藤村の絶調、江戸川河畔の聯に似通ひたるは作者の手腕?「夢多かりしわが身かな」は作者但し會心の句ならむ。

晩村曰 紫樓氏の云はるゝ如く、藤村の詩句をひるひしは作者のために惜む。

松廬主人曰 白妙の蝶にのりて龍の宮居たごれるさま、畫にやかむ。あゝ舞樂を見るやうなり。





須山規矩子



道 遙

神奈川縣程ヶ谷 須山規矩子

夕暮萩の花折りて

誓ひし友の忍ばれて

桔梗花咲く秋草に

木かげによりて佇めば

命は花の露よりも

別れは死てふ別れより

小萩のかげに夜もすがら

あまりに聲の細くして

君をたきては誰をかど

さまよひ來にし森蔭や。

夢多かりし己が身も

そらろに落つる涙かな。

なほはかなきはなからむに

更に永きはなからむに。

露になくなる蟋蟀

あまりに我の悲しさよ。



八千草茂る野にくれば

暮れ行く秋を早しとて

湖心に浮ぶ枯葉船

やがて漣消え行かば

夕風そいふ身にしみて

掬びて居れば鐘なりて

燃ゆると見えし西の空

光の衣ぬぎ捨て、

有心の我と無心の秋

物皆闇にかくれ行く

聲のみさゆる百舌鳥の

神に恨みをなくらむか。

そよ風吹きて走り行き

またも静かに秋の色。

尾花ちり浮く眞清水を

日は森蔭に落ちかゝる。

紫葺めし金峰も

早も山邊は夜の闇。

闇物皆を覆ひ去り

さても想の長さかな。

松風曰 野色蕭條。景中に亡友を忍びて、秋意殊に深し。

紫樓曰 野にいで、かつては我も歌ひしもの。君の詩をよみて思いと深し。

### 人の心

甲府市錦町八六 塙 よし子

小百合折らんと立ち寄れば

まこと唱ふる世の人の

ばらの一花手にとれば

すいしき人の眼にも

蛇こそすめれ花かげに

赤き舌にはつるぎあり

刺こそひそめ葉がくれに

底にあやしき光あり。

柴舟曰 西詩のおもかけあり、餘韻嫺々。

松風曰 薄情男兒、貪慾漢等、此詩に對して顔色なからん。彼の小民を凌



魁して、私に囊橐を思やさんと欲する輩、又不義の財を食りて、  
子孫の計を爲さんと欲する徒は、之を以て座右の銘とせよ。  
阻華曰 詩としては平凡なり、着想も奇ならず、されど、世と人との誦ふ。  
笠峰曰 阻華、評し得て餘蘊なし。われまた何をか言はむ。  
紫樓曰 柴舟氏の言の如く西詩の面影みるべし。

## 我 兄

久留米市庄島町 筑 紫 子

我兄は

國を守りの武士よ

たとへ屍は野に山に

さらさばさらせ忠と義の

みちをたどりて永久に

我兄は

軍の神も守ります

正義のつるぎふりかざし

平和の仇とたゝかふよ

千軍萬馬何のその

我兄は

君のみために死する身ぞ

なれば残りて母君に

朝夕侍して孝の道

ゆめ怠らずつくいでよ。

松風曰 類想なきにあらざり。

阻華曰 上二聯と結末の一聯との隔たりあり。末句そのサブセクトを知らず。

紫樓曰 我兄!! いかにも美はしき乙女が心をうたひてやさしけれど、調とこのはぬは口惜し。



水の流

尾道市十四日町 野田つや子

浮世の塵にけがれざる

清き深山の岩清水

淵によどみて瀬にせかれ

岩に碎けてちるときは

妙なる調べ奏でつゝ

流れくゞて行く末は

安き心もあら海と

知らでや急ぐ谷川を

汀に咲ける花うばら

憂ひの面わかたむけて

下ゆく水にいひけらく

「さてもつれなき水の君

かゝる淋しき山かげに

われを残して君はそも

何處をさして急ぎます

し〇〇し〇〇に止まりて

わが花かけにいこひませ

水は答へぬ「今更に

君行末を問ふなかれ

我とてこゝに止まりて

やさしき君が姿をば

また來ん春も水かみ

寫さまほしく思へども

流れ行く身をいかにせん

天のゑにしのだらば

もとの清水とわき出で

君が姿をうつさなん

今は別れんいざさらば

さきくてもませ花の君」

聞きてうはらは悲しげに

「君行きまさば誰とまた

この山すみを語らはん

人に知られず谷かげに

只むなしくやくちぬべき



清○き○は○な○じ○花○の○い○ろ○  
ふ○か○き○情○の○あ○ら○で○や○は○

こゝに残りていたづらに

共○に○ゆ○か○ま○し○末○な○が○く○

我○を○浮○べ○て○と○こ○は○に○

行○く○水○の○上○に○散○り○て○け○り○

花○を○う○か○べ○て○諸○共○に○

慰○め○ら○れ○つ○な○ぐ○さ○め○つ○

行○方○も○知○ら○ず○流○れ○ゆ○く○

か○り○の○契○は○淺○く○と○も○

君○に○別○れ○て○只○ひ○と○り○

そ○の○憂○終○り○み○ん○よ○り○は○

願○ふ○は○君○が○な○さ○け○に○て○

流○れ○て○行○き○ね○と○花○う○ば○ら○

影○を○や○せ○せ○し○谷○水○は○

心○を○か○た○る○さ○ゝ○や○き○に○

苦○樂○を○共○に○ち○ぎ○り○つゝ○

あ○は○れ○此○水○、○花○う○ば○ら○

松風曰 篇中に花うばらさあるを、山櫻にせんか、桃の花はいかに、山吹

に言ひかへんかなご、思ひしかごも、しばらくもこの儘になし  
きつ。何れの花が最もよく調和するかは尙よく考ふべし。優婉温  
雅、愛誦するに足る

咀華曰 まことに凡手にあらず。

又曰 山櫻、桃、山吹、薔薇、その何れをさらんかは、げに再考すべし、我は

むしろ桃をさらんか、蓋し、此詩景を願はず、情を望むが故也。

笠峰曰 詞句艷麗なり。晚翠の「紅葉青山水流急」にまれたる無けんや。

山 繞 滄 江 一 釣  
船 又 隨 斜 日 下  
長 川 小 魚 不 食  
大 魚 去 風 定 遠  
林 生 白 煙



熊岡谷  
たつ子  
本



松下泉

熊本縣八代郡  
宮地村 谷岡たつ子

立ちたほふ

松はしづ枝をさしのべて

泉にむかひさゝやきぬ

「わき出る水のつきせすに

底の濁りのなければや

行く人ごとにくまれつゝ

幸あるものは君なれや」

しづかなる

せゝらぎの音やすめつゝ

清き泉はこたへけり

「水こそ世々につきせざれ

底、將如何に澄とても

君が木かげのなからずば

立ちよる人もあらざらむ」



義清曰 一誦三嘆、敬服々々。

松風曰 奇松、水心に映じてやどす今宵の月色や、又いかならん。漢詩の趣あり。

阻華曰 水と木と共に君子なる哉、詩は輕妙なり。

笠峰曰 晚翠の「花と星」に似たる書きぶりにして、而も遠く及ばず。

阻華又曰 笠峰兄の此の詩を評するに晚翠を引き出す酷なる哉。

晚村曰 調清く、格高し。

## 野 戰 病 院

趣町區 森田松南女史

今しも擔架にのせられ  
そびらに疵は負はねども

テントに入りし士官あり  
額にしけき弾のあと

勇士のさまぞ忍ばるゝ。

擔架をおろすひまもなく

はせつきたりし軍醫あり

帽のいろこそちがへども

筋はねなしく二本なり

級に高卑の差はあれど

同じ若木の櫻花

遠征の苦に身はやせて

ゆたけき頬の肉も落ち

唇紅の色も無し

傷者の方へ走せよりて

看守る程もあらばこそ

はらくと散る露の玉

重傷になやむ戦友の

頬に落つるやれどろきて

かすかに目をば開きたり

身のやつれしに似もやらで

ながむる眼美しく

胸のいたでもしらす顔

希望にみちしその光



たがひにふかく見守りて

笑みをかはせる一刹那

萬歳唱ふるその聲に

片手は友の手を握り

のこる手腰の劔にあり

友と我とのこの世のわかれ

あゝ萬歳の聲、萬歳の聲

共に唱へし萬歳の聲

最後にかはし、無言の笑み

生れし月はたがへども

いつの世にかは忘るべき

我友去りぬ友さりぬ

死する日は共にどちかひてし

蜻蛉つりにしその日より

竹馬あそびの昔より

なりし今日まで片時も

共に國家の干城と

あゝさはいはじさはいはじ

はなれし時はなかりしを

たけき功を世に立て、

散り際きよき山櫻

疊の上に死なずして

千里異境の鬼となり

まことの武士の望をば

友は遂げたりわが友は

冷へ行く友の手をとりて

再び唱ふる萬歳の

まごゝろこめしその聲は

友も嬉しくきゝつらむ

ねむれる魂もほゝるまん。

松風曰 「片手は友の手を握り、残る手、腰の劔にあり」 吁千萬無量の哀文

字。竹馬の友の最後の愁状、これを劇にも上せん哉。

咀華曰 未熟の筆なれども情に於て勝るもの、一個の悲劇小説。

紫樓曰 夢は戦の野に走る寢臺の上。家信あるあれど眼失してよむをばす、

可憐、小女の聲によりて涙をよぶ……か。



秋の聲

尾道市十四日町 橋本東洋子

みどりの空はくれなるの

梢のひまをそともれて

岩間を走るま清水に

うつるもゆかし紅葉谷

風なきに散る紅葉は

音なく社殿の椽に落ち

さまよふ鹿のなく聲は

のどけくこだまに響くかな

を鹿の聲はそへ得ねど

うつし繪はがき都べの

住まへる友に送らまし

いつく島ねの秋の色

松風曰 清澹の想、典雅の調、妙に神韻を籠む。凡手に非らず。

咀華曰 凡手を去る遠からざるべし。一層の奮勵をのぞむ、松風氏、以來

過賞に偏するが如し、砂糖は多く虫齒をつくる

又曰 末段見るべし、賞すべし。

晚村曰 只いつく島根の秋色を偲ふ。

秋を晴に試生原  
 不白花葉在石畔  
 多怪底平涼秋  
 魚向相木葉上  
 雨深一多  
 何人そ道はゆめ  
 夕日橋子



五年十月

奈せんよ



濱 横  
子策島出 子光田寺



人形

横濱 寺田光子

朝な夕なに人形を

雪子と名づけ諸共に

この春祖母の都より

ねてもおきても我そばを

まだ五つにはたらねども

一人なだむるほゝるみは

幼なき君の友とては

かゝへつだきつたのしげに

遊ぶいとしの幼子よ。

送り給ひしこの人形

離さずめづる幼子よ。

雪子の母よとうなづきて

そも愛らしの幼子よ。

この人形の外あらい



あはれ雪の夜少女の  
氷るばかりの月影に

父は荒野の末にいて。  
此子をいかにたばすらむ。

松風曰 無邪氣なる少女の動作よくうつされたり。

咀華曰 筆足らず、末段突飛。

紫樓曰 人形は元祿振に肩作りの人のむかしを忍ぶ、好詩題。

松廬主人曰 突飛なるところ真情こもる。擬作ならぬが此詩の神韻ならん。

## 古 戦 場

伊 勢 伴 さん子

袂の兜うちかぶり

かなたの岡を根城にて

こなたの坂を關所にて  
幼なき友と戦ひし  
田圃となりて稲麥の花  
残るは僅か椎の森のみ

木の實の矢丸たくはへつ  
跡とひくれば今ははや  
吹く秋風にさどちりて

松風曰 戦争ゴツコをなして遊べる幼時までうち忍ばれていこをかしう承りぬ。

咀華曰 着想非凡。古戦場を歌ふもの常に秋風、鐘聲、血、鬼火などを踏出して陳腐千萬なる文字を列ぬる間に、此の可憐なる詩を得たるは、めでたし。一幅の水彩畫。

笠峰曰 觀戦者の眉目よかりし人、今は何處に。

松廬主人曰 げにく。



亂 調

長崎落葉女

なつかしかりし山里も

都の塵になやみては

憂き世の風にもれざりき

見よや！長閑にのぼる夕煙

聞けや！しづかに唄ふ馬子の歌

あゝされど

彼れも惱のかげにして

われ今こゝに海に来て

白帆もり來る一ふしや

これも惱の聲ぞかし、

夕、汀にたゝずめば

私が心と沖ゆく舟は

樂に見えても苦がたぬ

さりとは！こゝも亦うき世なりけり

あゝわれ迷ひの兒……………

山にたづねて山に得ず

海にあさりて海にわす

たまく／＼相見るそは將何？

平和にさける白百合や

永遠にさめざる漣や

われを迎へてほゝるみぬ

われを迎へてさゝめきぬ

さらば あゝさらば……………

うつし憂き世にわがねがふ

快樂はいづこ……………鄙都

そのたゞ人のこゝろにか



松風曰

君か快樂を求めんとて、濤濱に佇み給ひし時耳邊には輕妙なる囁き、足下には細々たる激漪、それにも快適の感に起らざりしか。カオルゾウカルス曰く「極めて微々たる花も、涙に餘る幽遠の思想を我に與ふ」と。花は唯人目を娛ましむるのみならず、又神秘と暗示とに富む。君が人生の快樂を海に求めて得ず、山に求めて得ず、終に平和の色を示して咲ける一片の白百合によりて神秘を語り、全く善美なる人心にありとの斷定を下し給へるは、實にパイロンの意と相一致せるものか。パイロン或時嘆じて曰く「美しき心を我が君として、沙漠にも住ひしかな。世の憂さを打忘れ、世をも恨みず、人をも咎めず、心ばかりを君に盡して」と。人として誰れか此感を同じうせざるものあらむや。高想溫麗、情調殊に愛すべし。

咀華曰

松風氏の批評文が本尊になつて……。

笠峰曰

格調凡ならず、亂調にして亂調ならじ。われは作者を愛し、作者を敬す。「そよたゞ人の心にか」の一句、翫々として斷ねざる想ひ

咀華又曰

後半寧ろなくもかな。前三句よく考へて見るこわからず。  
あり。されど「さりとは」以下、前半の痛切なるに及ばず。





井 福  
子 静 川 谷 長



旅順の戦に兄上の討死し給ひしを

福井 長谷川 静子

静かにふくや秋風の

庭の木の葉をはらふ時

軍用行李着したり

形見の上衣血に染みて

ところ／＼に弾丸のあと

かくいさぐれば鉛筆に

「旅順の秋、美香子どの 兄より」と

中にはそむや紅の

辭世の歌もあはれにて

「名に立てる旅順うらてに向ふなり

屍さらさん今日のたゝかひ。」



松風曰 昭落の號外は今着きぬ。

咀華曰 輕妙なる文字、但兄様の歌はまづいかな、軍人だからでもあらう。

笠峰曰 一讀泣然たり。再讀して咀華と感を同じうす。

松廬主人曰 あはれく君國にいのち捧げし兄君の歌。そをいためる歌共によしあしいふいさまあらんや。机上の筆と戦場の筆とを一つに見る咀華兄の評あに酷ならずや。

### 夏 雲

東京 嵯峨すみ子

仰げば高き蒼空に

浮びて立てる雲の峯

あやしきすがたさまづくに

神の自然のみかの

巧みの業の尊といや

忽ち起る天風の

つよき息吹にふかれては

もろく崩れぬ嶺の影

天にそゝりて仰がれし

氣高き姿あともなく

ちぎれて飛びて漂ひて

夏夕雲のたゝすまひ

見るくかはる果なさは

生れていきですぎて行く

運命詔しき人の世の

幸なき子らに似たらずや

あゝ君見すや悟らずや

夏夕雲のたゝすまひ

我世のさがに似たらずや

柴舟曰 雲によりて人生を思ふ、事すでに陳なりと雖もまたすつべからず。

咀華曰 すつべからされども、清新の趣を缺く。

江風曰 はかなきはげに雲にも似たらんかし。「きらめきそめぬ星一ツ」これこそそこに安けさと思ふを認めすや。



笠峰曰 佳作なり。江風氏の評大に味ふべき言なり。  
紫樓曰 夏雲を力なく歌ひたるはさらず、夏雲には沙漠の獅子をうたひて  
こそふさへ。

孤 兒

牛込 佐藤深雪子

誰が吹きすすぶ笛の音か  
袂に寒き風たえて  
あゝ世を捨て、捨られて  
望みもたれて露の身を  
いばし命をつなぐべし  
高殿あたひいきつゝい  
今宵も白く霜冴えぬ。  
慰みもなき塵の世に  
など今日までも惜みけむ。  
たつきを得ばとある時は

破れし琴をかきいだき  
たのしき往時思ひ出で  
涙の頬に傳ふとも  
爪とる指は火にもえて  
小歌の節も打ちふるひ  
かいれとてしも垂乳根は  
世わたるすべと云ひながら  
あゝ幸薄き少女子の  
助くる姉はあらずとも  
悲しいかなや力なき  
大路小路を迷ひしよ。  
胸に手をあて泣く我れの  
誰れかあはれと拭ふべき。  
胸は想に亂れては  
たい拙なしと笑はれぬ。  
琴ひく業は教へじを  
實にあさましの我身哉。  
か弱き身とし生れずば  
運命の波はこえてんを。  
細き腕も頼りなし



世に孤兒となりはて、

苦き涙に咽ぶ身は。

さはいへ絃によき音なく

聲また涸れてふるふとき

汚れ果てにし世の人の

耳に入るべく汚れなば。

身はしほみゆく白百合の

おく夕露と消ゆるとも

あゝ明日よりは絃たちて

再び琴は手に取らじ。

江風曰 やさしきが中に世に怨ある人の聲を聞くべし、冒頭の四句、殊に全篇に活趣を添ふ。

咀華曰 唧怨長く極まりなし。哀調人の腸を抉る、至賞に値す。

笠峰曰 想もよく詞句もよく、三詠に値すべし。

柴舟曰 情味甚だ深し、佳句また多し。

松廬主人曰 吾が友關根がついていへらく、三絃を歌ひて人の門に立つは自ら招けるもの、琴をひきて大路ゆくは天のなせる藁なりと。此の

歌にてふとおもひ出でぬ。さるにても斷絃、あゝ斷絃、絃果して何のつみかある。至情痛恨。汚れぬ耳あらばまた絃をつなぎたまはんや、いかに。

戦地の弟より玉章に野菊一輪巻き

込めて送り越しければ

備中玉島町 大西益子

羽風も強き荒わしの

棲家となれる満洲の

大野の原も秋風の

吹きいれにけん優しくも

自然の神に抱かれて

愛のみ袖にかくるひて

匂ひそめにし花野菊。

大和男子にゆかかさへ



濃紫の花の香は  
戎衣の袖に磬りけん  
故國に寄する玉章に  
手にとり見れば今更に  
さやく如く偲ばれて  
小片嶺に通ふなり

銃を枕に露營する  
汝が手に摘みてはるぐいと  
巻こめにたる花野菊  
汝が心根の優しさを  
夜毎の夢は遼東の

日毎書見る文机の  
小さき箱に秘められて  
恙もなくていさをしの  
輝く如く鴉の羽の

上に置かれし花野菊  
送りしぬしのそがうへに  
高き譽は日のみ旗  
章を胸に飾りつゝ

意氣堂々と歸ります

日をこそ待ためそれ迄は

香さへ色さへ萎まらずに

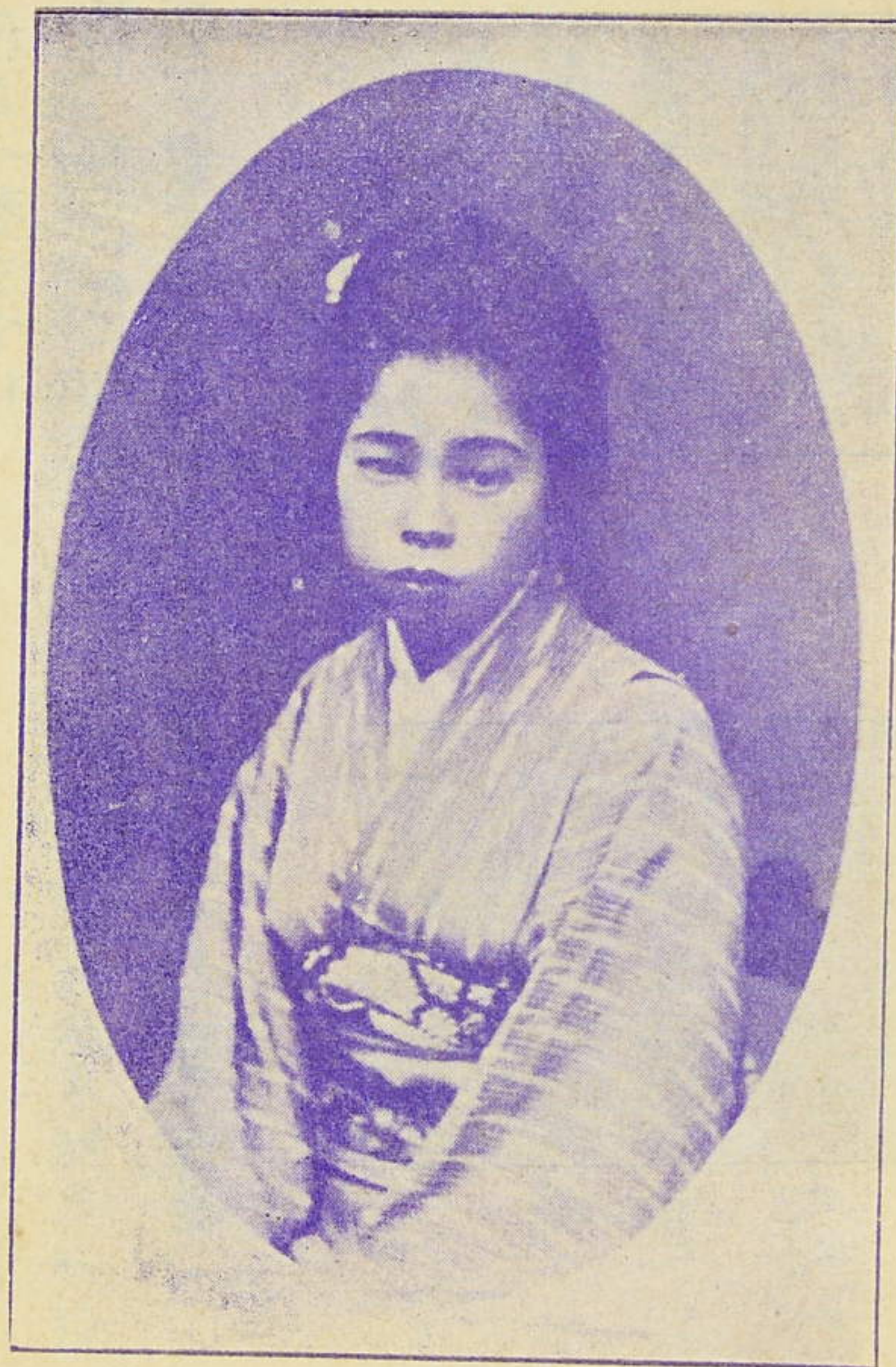
笠峰曰 我れにかばかり優しき弟なきを憾みます。  
紫樓曰 野營の夢に君こあひて……やるせなの花の野菊よか。

清山深き人  
居少く産松多  
老海而松風は  
夢醒凌音を  
落中林を  
西人曰 本おこ

住のよ  
庭のよ  
と秋の空  
まじりにまてふ  
あはれ  
か思ふ子



大崎山  
登代子



亡妹を忍ぶ

大隅山崎登代子

空に一聲ほとぎす

血に泣き過ぐるも哀れなり

あゝなつしの我妹よ

今はいづこに遊ぶらん。

蓮の花さくみ佛の

愛のみ手にすがりつゝ

笑みて我をばまつらむか

思へば容姿目にもみゆ。

池のはとりに走りゆき

持ちし小麩をなげ入れて

姉さん一寸お出でては

深山金魚が浮てゝよ。

わたしの興へたあの餌をば

ホ、一しよにたべますよ

姉さん早くお出でゝば

お椅子をもちて來ませうと。



あのみよちやんの呼聲が

我に得堪ぬ思ひあり

年はいくつと尋ねれば

母は何してゐますぞと

片こと交りのあの言葉

みどり房なす黒髪に

三日月眉の美しく

みるもやさしきうす化粧

我を呼びにいかの聲の

まことの影の見えぬこそ

なほも耳邊に残りつゝ

我に無情のうらみあり。

出すや片手の初紅葉

問へばわたしの衣ぬひてど。

あゝ俤の忍ばれて

鳩のまなこの愛らしさ。

林檎の頬のふくらかに

ゆかたの袖をふかしつゝ。

今も目耳にのこれども

我に無限のうらみなれ。

み空に低き夕雲の

水に光を沈めては

我庭もせの夕顔の

共に遊びし妹はなし

今はいづこに遊ぶらん

思へば容姿目に見えて

五彩霞のかに匂ひつゝ

咲くをれそしとまちわびし。

一輪二輪咲きぬれど

あゝなつかしの我妹よ。

月の宮居の龍宮か

我に浮世のうらみあり。

松風曰 無邪無念、少女の唇より出づる詞の愛らしさよ。俗語を挿入して

一首の調和を破らざる所、非凡の才。

紫樓曰 黄昏、うつくしの花を買ひて、さびしき追想たざる君が心、思ひ

あまりていさこの詩の崇きをおぼゆ。

阻華曰 闇雲低くたれて、かすかに杜鵑の聲をきく、悵無量。されど筆は

未し。



晩村曰 ありのすまびのつらかりしを忍ぶは、亡き數の露の白玉くり言の  
常なるものを。

### 捨小舟

日本橋區本材木町 一ノ一五山田方 しづ子

風なまぐさき滿洲の  
虫もなかなん雁もこん  
高き香りを高きねを  
砲の煙りとなりまし、  
一人の母を世にのこし

荒野も花は咲きいでん  
その花よりも虫よりも  
戦史の上にふりたて、  
己が背の君のいさましや。  
一人の稚子を世にのこし

國のみ爲に逝きまし、  
さゆゆく月に雁なきて  
子のゆくすゑを案じつゝ

君はいづこにひますらん  
思ひ出多き秋の夜を  
砧うつなりよもすがら。

松風曰 戦死の夫を忍びつゝ秋夜衣を搦つ音に、背の愛兒は泣けるや、は  
たよく眠れるや。

阻華曰 砧聲やいもすれば亂れんさほする。  
笠峰曰 女らしき筆つかひなり。わざさらしからずして、至情濃かなるも  
のあり。

### 降雨吟

長崎縣北松浦郡平戸 江上順子

檐端をもるゝ筑紫琴

弾く手妙なる調べかな



雨を晴らさん心にか

美音絶ゆれを雨たねず

机の島や流されん

橋も落ちたり舟もなし

詩想をこらす東窓

無聊に堪へぬすさびにか

硯の海は水ましつ

心ゆるすなふみの道

音信れたいて今日幾日

庭の苔の上雨静か

松風曰 茅檐蕭々 無聊限りなし。辭藻温麗。

咀華曰 作者自ら此の詩を以て警むるもの乎。

松廬主人曰 おのれ一人の姪郷里にあり。いつぞや歸省のをりは、祖母の  
後にかくれて「お久しう」といふ挨拶もうひくしかりしを今日此  
の中にその名を見んとはおもはざりき。歌、意を爲さず松風兄の  
評などで當らむ。咀華兄の示したまへるこそよく警めゆかば、  
おのづから橋も出来なん船も寄せ來む。やがて彼處の岸にまゞき  
ぬべし。

たぐつきごころ

名古屋市下長者町三ノ一九 青木 穠子

手向けし菊の香りより

れもへばいとも悲しさに

千年のよはひ汲むといふ

まだ新らしいきおくつきの

ありし昔をしのびつゝ

心も知らでをさな子は

我が父上はこのしたに

たかきは夫が譽れぞと

たへぬ心をたれかする。

花のしづくのはらくいど

前に散るかもうらめしや。

たへぬ思ひの母親が

袖にすがりてかくとひぬ。

居ますときくはまことかや



風吹く夜半や寒からむ

いでやけふころ諸共に

聲もくもりてふりあふぐ

さながらなるを見るにつけ

よわき心を知らさじと

そなたが父はかしこくも

唐のあら野にはびこりし

稜威を外にかゝやかし

青葉にかはる夏の頃

波路はるけく打越わて

一人淋しいたはすらむ。

かへりて行かめ母上と

あ子が面の亡き人に

せき来る涙とゝまらず

胸をおさへて母はいふ

我大君の召しにより

露の醜草切りなびけ

御旗の光示さむと

勇みて故郷を後になし

はけしき河も徒渡り

霰たばしる寒き夜も

まごろみあへず朝嵐

ありとあらゆる苦しきも

忠義にこりしものゝふが

多くの砦攻め落し

世間にたぐる無しときく

部下の兵士引きつれて

よせ来るあたり一と突きに

ものゝ敷ともなさずして

折りから有縁の一丸は

銃を枕に野邊に伏し

すさぶ山邊を攀ち登り

御國の爲とむもひ入る

向へる方に仇はなく

進みくして沙河の役

此の戦ひに勇ましく

雲霞とまがふ大敵の

前へくとして號令し

一步もひかぬ激戦の

あはれ眉間を貫きぬ。



しり居にござと倒れつゝ

天皇陛下萬歳の

名譽の戦死をとげましゝ

兵士の勇氣ふるひ立ち

天地にひゞくかちごさの

たそれ多くも大君は

下し給ひし勳章は

かゝる忠臣父上を

學びのわざを極めわて

楓の如き手をとりて

尙も片手を高くあげ

聲もろともうちゑみて

此の目ざましき有様に

難なく仇を追ひ散らし

聲勇ましくわきたりき。

このいさをしをあらはして

柩の前にかゝやきぬ。

持ちたるあ子は一すぢに

家の譽れを汚すなど

説きさとしたる言の葉の

をさな心にしみつらむ

近づくひづめの音は誰

皇軍人のうち乗りて

子は立ち上り指さして

なりてこたへむ大君に

ぬれし面に打笑みし

言葉さく身やいかならむ

涙拂ふとそむけたる

墓標の文字にとまりけり

定めがたなき秋の空

涙は頬に玉なしぬ。

駒の足並輕やかに

過ぎ行く姿なつかしや。

母上我れもあの如く

成りて報くいむ父の仇。

我かなし子か頼もしき

聲さへなくてうつむきぬ。

目はあやにくや我背子が

つめたき石にとまりけり。

風立ちさわぎ降りいでし



時雨のあめに親と子が

四つの袂ぞぬれまさる。

松風曰 流麗にして輕妙。正に一篇の教訓詩。委曲想達、不凡の筆といふべし。

晚村曰 松が枝にかけたる琴は、さびしき暮をなりいで、亡き人の夢やもらむ、至情詩の上に溢る。

咀華曰 奇巧なけれども、眞情あらはる。

## 松 下 泉

神戸 鈴木まさ子

涼しき月にうかれてぞ  
清く流れて苔岩に

またも來にける松のかげ  
囁く清水の岸の邊に。

あゝ我獨りたゝずめば

過ぎし昔のなつかしく

去りにし友の戀しくて

江堪へぬ思ひを湧き出づる。

春は岸邊の若菜つみ

秋はみぎはの千草とり

夏の夕べは螢追ひ

冬のあしたは雪をめで。

ともに遊びぬ松かげに

ともに語りぬ此の岸邊

松よ泉よ言問はむ

あゝその友は今いづこ。

松風曰 松聲唯颯々たり。泉響唯冷々たり。

笠峰曰 われ嘗て神港に客たりしことあり。この詩を讀みて、そらる夢野村の夕のさまよひを忍ぶ。

晚村曰 夢さしがしの市のひさり居、われも松ふく風の静けさに詩は思はんかな。

咀華曰 陳。



越 後  
岩 本 芳 子



疑 心 (英詩和譯)

越 後 岩 本 芳 子

第 一 音

燕は何地去りにけん  
海べにありておそらくは

吹く風寒くあれすさぶ  
凍江死せるにあらざるか

第 二 音

あゝ君心いたむなよ  
越わて遙かにつばくらは  
南風かをるところにて  
またかへらなん時をまつ

みどり湛ふる海いくつ  
照る日の光りこゝろよく  
北なるかれが古さに



第一音

何故花は凋みけむ  
心にとめて冷墳に

そゝぐなみだの雨をしも  
やぶれはてゝそ埋もれける

第二音

あゝ君心いたむなよ  
又の愉快を得させんと  
貂のものとごなめらかに  
雪の下にてねむるなり

花はまもなく咲きいでゝ  
みなよの風の吹くうちは  
かつやはらかくかつ白き

第一音

こゝ數十日のその間

日は其光りかくすなり

心さびしき此の時は

たわて此の世を去らざるか

第二音

あゝ君心いたむなよ  
嵐はらめる村雲の  
やがては夏もかへりきて  
そは春のいと近ければ

一つたのしきみ空には  
高くかなたに蔽へども  
うれしき時となりぬべし

第一音

さしもの望たねはてゝ  
何のひゞきかたもしろく

光は夜半に消ゆるせね  
主のうき寝を破るらむ

第二音



あゝ君心いたむなよ

とざ、れ居れを末つひに

星はみ空にあらはれて

この時までの暗ゆるに

ひときははしるく輝かむ

天侯の聲は銀のごと

ことに楽しくひやくらむ

松風曰 英詩和譯は誰しも其調格に於て心を勞する所なり。此篇、詞調共に委惋典雅、以て愛誦するに足る。

咀華曰 碎けざるころあり。原詩を知らざればしばらく黙して止まん。

### 師に訣る

(去年の秋、城井先生の我が學校を辭し給ひて、都に上らせ給ふ折よみて奉れる。)

伊勢 宮崎 道子

淵瀬定めぬ飛鳥川

流れてかはる人事の

果敢なきものは世の習ひ

あはれ彌生の花の空。

霞める月に誓ひてし

師弟のちぎりは五十鈴川

淀に結ぶうたかたよ

大人はみやこにわれは伊勢。

雲井はるかに訣ることも

雁のゆさかひたねざらん

嵐にちりしその花も

また來む春は美はしく

霞む梢にさきもせむ。

ゆかしき月日の花車

めぐりくゝて尙も亦

高く尊き師の君に

見ね參らする春あらむ。

君がみ庭に萌ね出づる

教草つむ春あらむ。

寮の窓かた端近く



文机するてから國の

師の面影の忍ばれて

戀ふる心も仇なれや

押しては思ひ返せども

逢ふは別れの初ぞと

昔も今はうらめしや

枯れて淋しき秋の風。

ひじりの文を見る度に

います都も近くばと

唯かりそめの別れぞと

といめあへぬは涙なり。

かつ知りながら頼みてし

月に誓ひし言の葉も

松風曰 師弟の厚情淳々、紙上に溢れたり。涙を漉ぎて見送り給ひし師の

高恩を忘れずして、勉め給へや、勵み給へや。韻致溫雅喜ぶべし。

笠峰曰 われも、作者の師と同一の小歴史を有すれども、今は破れ袴に見る影もなし。

阻華曰 笠峰先生、破れ袴ごころか、銀縁眼鏡に仙平袴、威丈高にステ

ツキ振る身なり。

### 憐れの少女

伊豫 大久保はる枝

なせ母上は妾をば

早く見すて、去にまし、

父上あれど幼なきに

遠く別れて西東

羨ましきは父母の

ある友たちの身の上や

朝な夕なに暖かく

たのしき庭に育てられ

さわご妾は父母の

めぐみの庭に育ち得ず



たゞ慈悲ふかき伯母上を  
人となりにし今の身よ  
愛で給へるぞ嬉きや  
わざをば卒へて中等の  
入りし春より怠らず  
月日の駒の足はやみ  
窓の光のしるしには  
いざこれよりは女身の  
硯の舟にうち乗りて  
育てられたる伯母上の

父とも母ともたのみつゝ  
伯母上妾を子の如く  
厚きめぐみに小學の  
學びを修むる宇治校  
學びの道をたどりしが  
螢や雪をあつめたる  
めでたく卒へぬ女學校  
かよわ乍らも學び得し  
筆の棹さし今の身に  
山より高さその恩に

酬いんものと奮ひ立つ  
風あらく吹きすさみ  
されど百難屈せずば  
めでたく末は父母に

社會は廣き海なれや  
おして行く身の悲しさよ  
やがて希望の岸につき  
めぐり逢ふ世の幸を得む。

松風曰 勵み給へや、勉め給へや。わきて高思ある伯母君は大切にし給へ  
かし。可憐なる少女の君よ。君の實歴はこの哀なる筆によりて泣  
かざるを得ざらしむ。

笠峰曰 浮世は渡つて見て、始めて趣味多きを覺ゆ。乞ふ悲觀する勿れ。

紫樓曰 「かへり見の君が由緒の夢小草、花さく野邊の春をこそ思へ」

阻華曰 詩は拙劣、「硯の舟に打のりて」など如何や。されど我も、父の顔  
さへ知らぬ身の、生れて二十餘年、今なほ一人の叔父のために、  
もの學ぶもの、いかでか此詩の拙なるを捨てんや。



かざしの音

岩手縣紫波郡志和村 北條文子

小夜ふけて

人しづまれる閨のうち

かすかにのこる燈火に

我と我身の影を見て

やつれ姿ぞはづかしき。

おもひまはせば何故に

我は此の世に生れきて

死ぬを待つ間の命をば

はかなくかくもをしむらん。

長かれと

蓬萊山に千代かけて

深くちぎりし春の君の

かはるも早きあすか川

うつ世の人となられしか。

つれなき此身の淋しさに

奏でんとする妻琴を

戀にやせたるかひなもて

獨りいだきて獨り泣く。

此の浮世

とても命は長からぬ

ものとしるくいつまでも

うきこと故にながらへて

つひにきわゆくわとを見ば。

骨も細りてのこるらん

よしそれとても情けなき

うき世の人はいかでかは

哀れとだにもとふべきぞ。

哀れさに

顔にもつるいはつれ毛を

かきあげつゝも窓ひらき



心ともなく見出せば

雲間にさむし月の影。

脊の君戀ひしと泣き伏せば

眞髪抜けいで庭石に

落ち散るかざし音悲し

世はうす墨とくもりつゝい。

松風曰 鴨長明曰く一行く水の流は絶えずして、しかも、この水にあらず

と、あゝいさをしき名は流れても河水の逝きて歸らぬ君の悲しき

嗚呼曰 琴柱はくちて、絃斷ちぬ、紫帳紅閨何ぞ涙の多き、銀釵一擲果し

て恨を訴ふる響ありや、文選別賦の一節、もこより之と比すべか

笠峰曰 作者はなれた詩そのものさして之れを見れば、未だ讚辭を呈す

るに値せず。されど作者の心を歌ひしものさすれば、一滴の涙な

松廬主人曰 人生の悲慘よくも歌ひたまへるものかな。されどくうす墨

さくもる空にも晴れゆくをりは、やがて眞如の月も昇りぬべし。

あやなき願ひかはしられど、入境詩境今一步をすゝめたまひてん

渡 守

土佐 榮田多稻子

病を故郷にいやさんと

不快の我は歸り來い

三年の昔渡りたる

村のはづれの物部川

床しき父母と別れにし

やさしき妹と別れにし

戀しき君に送られし

三年昔の物部川

業ならずんば郷を出で

よしや死すとも歸らじと



ちかひ立てたる此川の

流は昔のまゝなれど

人は見知らぬ人ぞかし

去年の夏の末つ頃

僅三年の夢の間に

仁兵衛はゆきて復見せず

僅か二つの弟なり

水は昔に變らねど

變りはてたる船守の

あの人好しの仁兵衛は

歸らぬ旅に出でしとか

我は不幸の兒となりぬ

嗚呼父上は仁兵衛に

いかに變らせ給ふらん。

松風曰 委婉清思を曲盡す。輕鬆の筆。田吾作は未だ健全なりや否や。

照華曰 初二句拙惡、結末二句高遠、今一層の用意を捧ぐれば好詩篇たる

を失はじ。

萩 桔 梗

東京 今 ひさ子

桔梗はゝるみ萩匂ふ

別れの袂しぼりしは

うす紫のそれとりて

ちかひし友は冬枯の

夕風重き萩桔梗

ことしの今は友なくて

野路の夕露ふみわけて

思ひぞ出る去年の秋。

君さちかうに我萩と

都の野邊に散にけり。

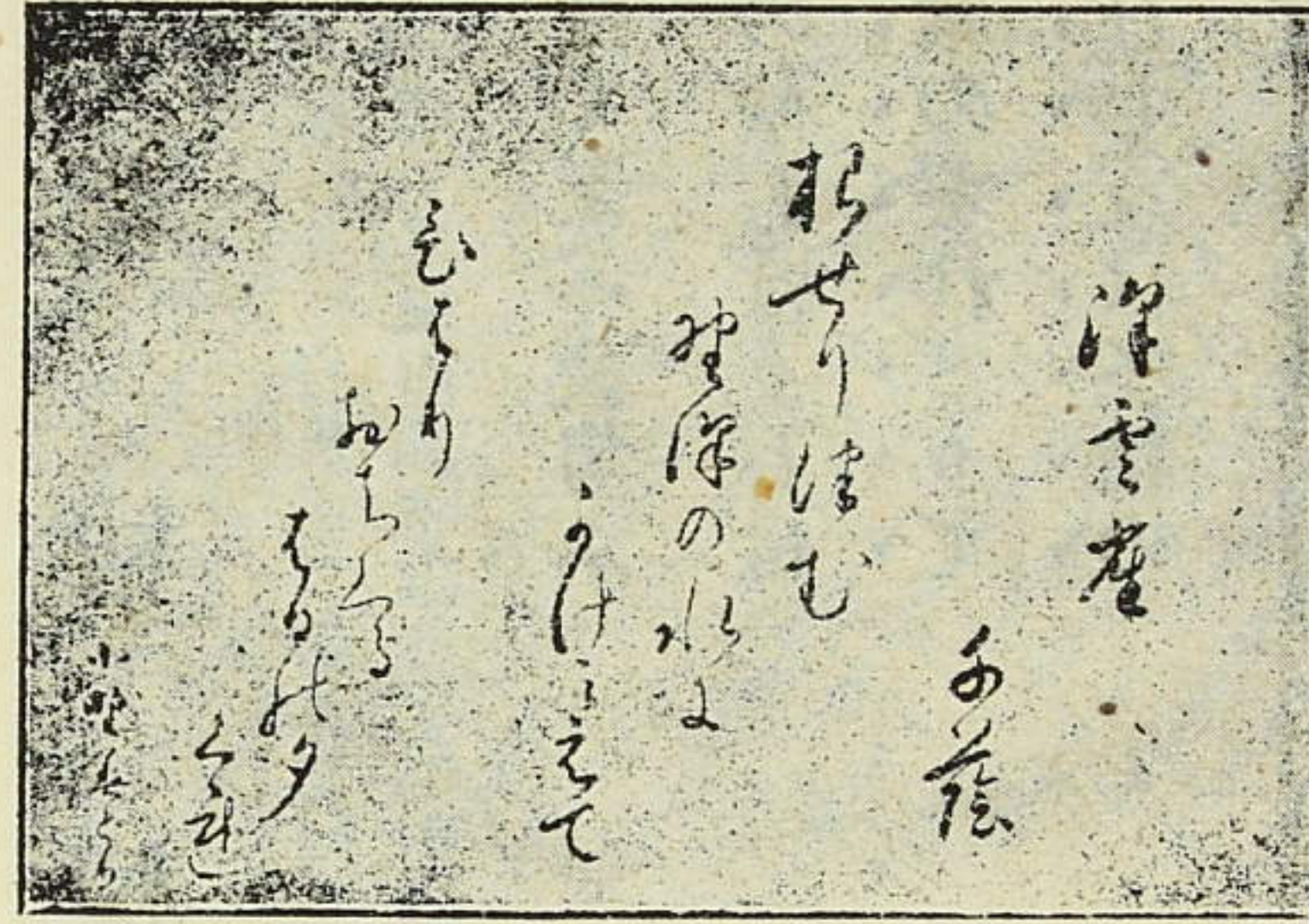
露さへ去年の儘なるを

たゞ花のみぞなつかしき。

松風曰 今年の秋は桔梗の花を手折りて、友の墓を訪ひ、此歌を手向けら

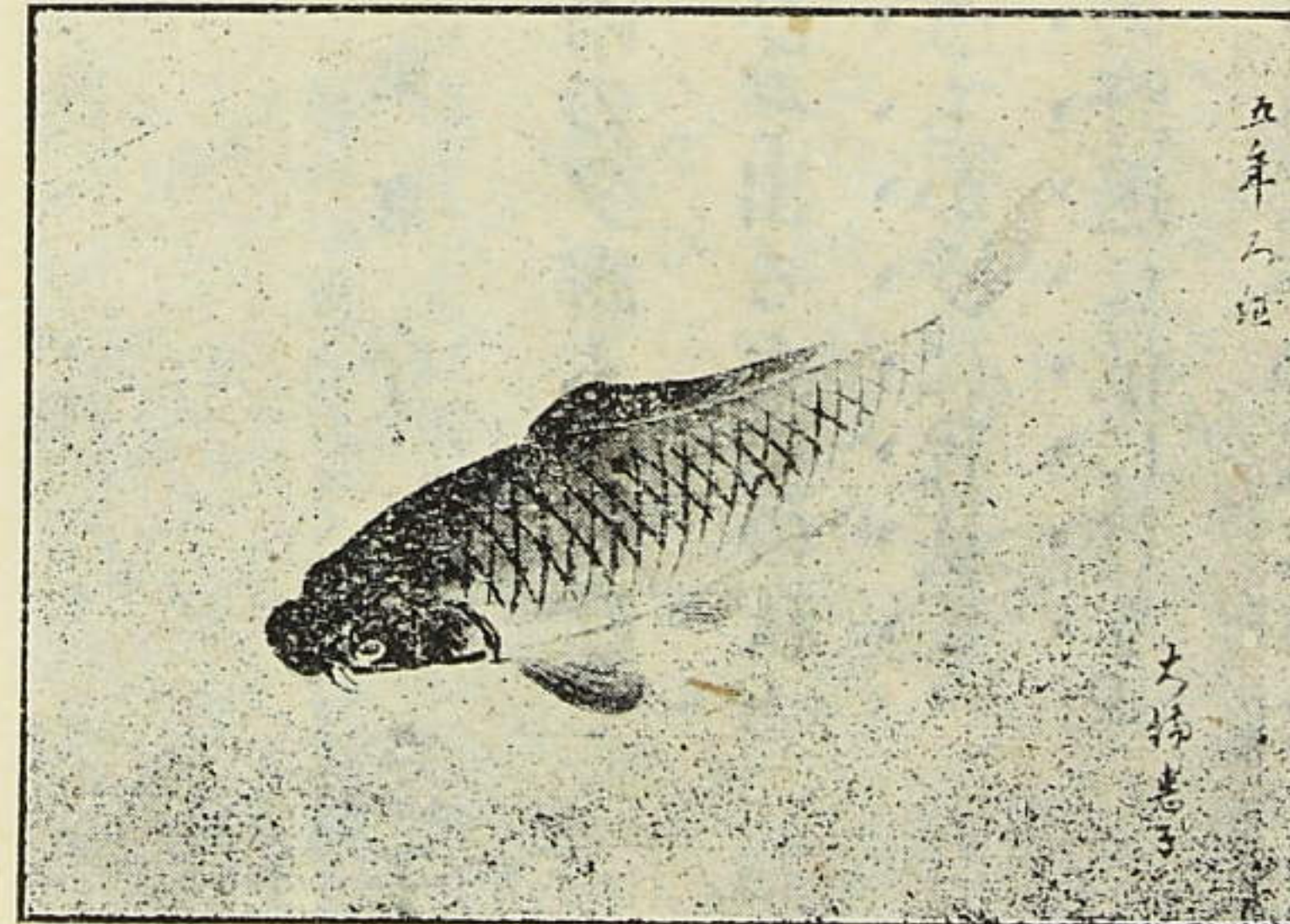


京 東  
干 操 林 小



咀華曰 稍凄婉の趣あり。  
紫樓曰 よく調ひたり。

れよかし。



五年の記

大橋忠子



天長節

東京 小林操子

花壇の菊は咲き亂れ  
津々浦々のはて迄も  
我大君のあれまし、  
外には國威の日に揚り  
田面に黄金の波よする  
さみを祝ひて喜びて  
聲は天地にごよむなり  
征途につきしますらをも

山路の紅葉は染めつくし  
朝日のみ旗翻るがへし  
今日のよき日を祝ふなり  
内には惠の露しげく  
最も芽出度き今日の日と  
萬歳唱ふる國たみの  
國の爲とて勇ましく  
稜威輝く大君の

天降りましたる今日の日を  
東を向きてゐるがみて

今乗り取りし城塞に  
杯舉げていはふらむ。

松風曰 詞采鮮媚、謳吟以て聖壽の萬歳を祈り奉らん哉。  
咀華曰 此の詩を以て「詞采鮮媚」と稱するもの、是れ松風氏の語乎。但し  
天長節はめでたし。

試筆

山口 久保思雨子

きのふつくしのをばしまに  
たどれと云ひて頂きし  
ちいさきむねに秘めつつる

わが敷島の道深く  
ふでをなぶるか幼な子は  
歌のすがたやいかならん。



寒紅梅のかけやどす  
小窓をみぎにうつむきて  
母さまあちへましませと  
すいりに白き筆の穂を

晴着ゆかしき裾模様  
書かむともせず幼子は  
うらむが如くほゝるみて  
なほもなぶるか今年の子。

柴舟曰 優美可憐、常人の思ひ及ばざるところ。

咀華曰 清爽、一幅世情の景。

笠峰曰 願はくば幼子をして、後の悔なからしめよ。

紫樓曰 若水に君が硯はあらはれしならめ。

學 校

静岡 古見 薰子

吾は陸軍大將に

妾は篤志看護婦に

はた楠公にチルソンに

紫式部、ジャンダーク

こゝろくに希望をば  
教案つゝいかにまには  
葡萄の棚の下かけに  
みどりの髪をなでやれば  
唇よりぞ現はるゝ

吾はくと叫ぶなり  
作文直すいとまには  
受持つ生徒呼び集め  
紅をむるはなばらの  
にじ青雲や北斗星。

松風曰 人物躍然、青雲の志氣抑ふべからず。

咀華曰 やさしき先生様の、兩手にむつるゝ可憐の兒女が聲を聞くが如し。

笠峰曰 作者の境遇の、さても羨ましい哉。

松廬主人曰 教育にたづさはる身はわきて一誦感深し。



戦利品

麴町 高橋つる子

風、妖雲を起しては、  
醜草ために露置きて、

愁風ふかく満洲の  
山岳ために雨そふる。

我日章の旗振れば、

彼は汗馬に鞭をあげ、

われ秋水の劍とれば、

彼れ砲銃の火蓋切る。

此方に將師叱すれば

彼方に砲車の響あり

豺狼一嘯牙を研ぎ

虎龍怒つて雲を呼ぶ。

篠つく劍戟耀めくは、  
くれなる染る弾丸は、

玉露た走る秋の野邊  
落花みだる、春の庭

早も腥風野に充ちて

死屍又算を亂しけり

関聲急にれこつては

また叫喚の聲止んで

一時につぐる萬歳の

響きに草も靡き伏す

見よ遙かなる山嶺を

日章の旗ひるがへる

萬籟止みし跡見れば

千古の紀念に月ぞ照る

感懐多き戦利品

恨は永世つきずして。

松風曰 韻致雄健にして快馬陣を祈り、勢ひ行を留めざるが如し。



咀華曰 雄健の詩、三讀之を要せざるも、一讀豈値なしとせむや。

萩 桔 梗

高知 高橋ゆき子

五とせ異郷にさすらひの

遊子の身にもしかすがに

秋風たてば古さとの

五畝の庭なる萩桔梗

いとゞしくころ忍ばるれ。

朝戸出うれしき五畝の庭

露の香にゑひつゝいも

希望にみてる聲あげて

情の歌を我れずせば

うなづく如し八重桔梗。

歌にこりたる瞳もて

をいろ見まもる五畝の庭

み空の星よ置く露よ

夜のみ神のゐますらし

かゝやきくしきま白萩。

五とせ異郷にさすらひの

遊子の身こそはかなけれ

希望の光胸に消ぬ

なれし歌筆なげやりつ

運命つらがる我身かな。

秋風通ふ朝まどの

こき紫の八重桔梗

むかしをかへす花の香よ

五とせ異郷にさすらひの

我すゝ歌のうらぶれぬ。

思出多き夕空や

白露重きましろ萩



星は葉毎にひらめけど

わが身ようたて歌のなき。

遊子の身をばはかなみて

なれし歌筆やきすてぬ

秋は淋しき旅やかた

あだしき人の土かひに

昔ながらに匂へりや。

五とせ異郷にさすらひの

秋風たてば古里の

いとしくこそ忍ばるれ。

五とせ異郷にさすらひの

希望の光むねに消ぬ

我運命のつらきかな。

はする思ひは古里よ

五畝の庭なる萩桔梗

遊子の身にもしかすがに

五畝の庭なる萩桔梗

松風曰 詩は芳蘭の如く、想は湧泉の如し。殊に「五とせ異郷にさすらひの」

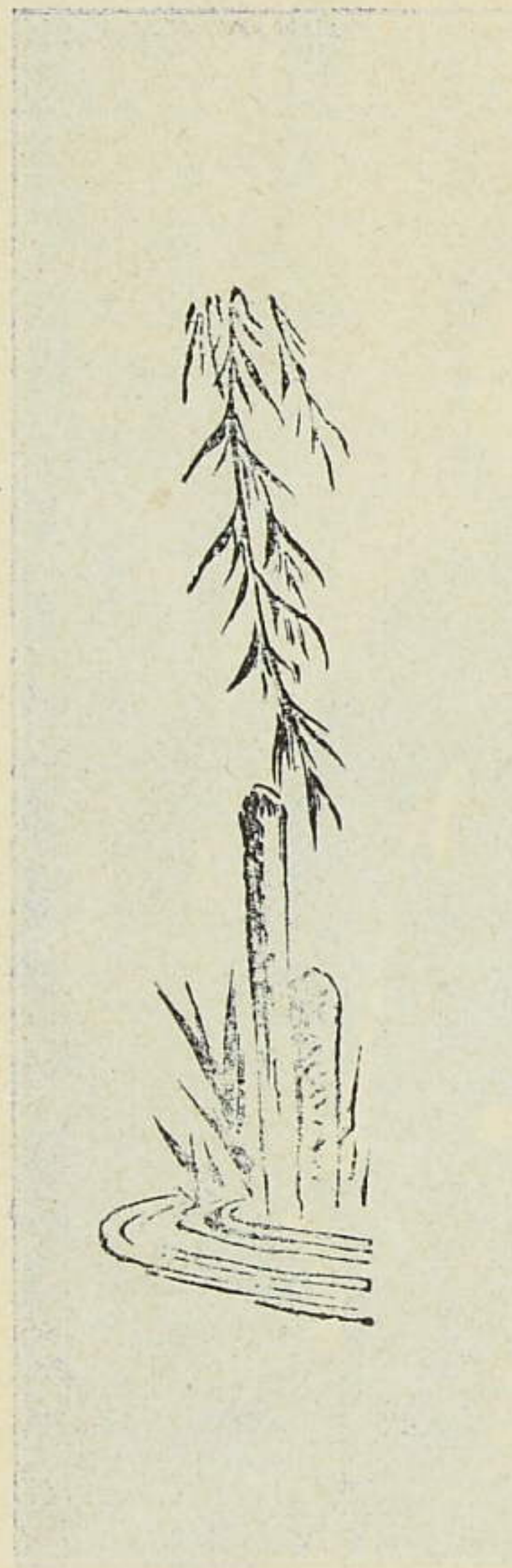
と「五畝の庭」の語を、篇中の五ヶ所に點出せるが如き、布置の妙を得たりといふべし。あはれ、君が吟懐の慕はしさよ。

咀華曰 誰か五畝の庭に、今を昔の梁夫吟！

又曰 運筆自由、同一の文字を布置して、讀む者をして倦ましめざる所

至賞に値す、我また松風と感を同うするもの也。

晩村曰 こぼれ萩、ふしたる桔梗、さりぐにをかしき節あるべし。





千内堀  
葉くふ子



かざし

君に送らむこのかざし  
高きかをりはあらずとも

あれたる園に咲く花の  
深き思のこもらんを。

心つくしの露の玉

かわかぬ間とて葉の末に

宿りて光る心をば

汲みて哀れとたぼしてよ。

あはれ興なき鈴蘭の

御ぐしのてりに添ひもせば

深山をいでゝ里とほく

浮きつ流るゝ花びらと

同じ運命を喜ばむ。

松風曰 奇想雅調。花もし心あらば此榮譽を如何に感すらむ。



咀華曰 優婉高雅、三誦に値す。

笠峰曰 色うつくしき花たげに、やさしきこの詩を添へて贈らるゝ人は多  
幸なる哉。

紫樓曰 だらくさま長からず、しかも筆致の老練、調の熟したる見るべし。

松廬主人曰 友情簪の花ささく。かくてこそ歌のかひはあれ。

都 落

高知 公文 益枝

輝き昇る朝日子の  
ちぎれくいて西空に  
壽永の春の明け方に

射たけむ征矢に白雲は  
淡くも沈み消えてゆく  
故郷の花をしれたひつゝ

冷たき都たづねきて

五條の館を打たゝく

雅びの武者のかげ哀れ

紺地錦の直垂に

小具足ばかりはかなげの

供奉の武夫只四五騎

昔を忍ぶ熱涙に

こぼるゝ露もとけやせむ

まして靈なる人の子の

血潮のめぐる生身に

露のなさけのなかるべき

嬉しき師君の同情は

怒濤千里の海原に

煙れる影をのぞむごと

深淵萬丈の絶谷に

すくひの網によりし如

ゆるむ心の束の間に

數百の敵をうちにけむ

猛き腕にいくしづく

次第に告ぐる鶏の音に



さらばと斗り小鎧の  
消へ行くかたみと小巻物  
妙なる筆に美しき

直垂の袖より取出でい  
花の匂ひに月の色

みやびの限りうつしては

縷々の思ひをまき込めて

涙の君にのこしつゝ

駒たて直すあけの門

ゆるむ手綱を引しめて

かなたの空に落ちて行く

折しもひびく明けの鐘

一聲高く朗らかに

歌ふもあはれ前途の詩

後會期なきはかなさに

見送る人も袖しぼり

かげ今かすむ遠方に

駒のいなゝく聲高し。

松風曰 余平家物語を繙く毎に、忠度都落の條に至りて、袖を濡ほすが常

なり。君も亦然るか、幸に「故郷の花」の歌一首は、俊成卿の手に  
依りて、千載集中に加へられしに於ては、忠度以て瞑すべきなり。  
三位に親しく歌集を渡し、門を出で、薩摩の守「屍を山野に曝さ  
ばさらせ、淨名を西海の波に流さば流せ、今は思ひおくこと更に  
なし」さて駒に打乗り、

前途程遠、馳思於雁山之暮雲、後會期無露、纏於鴻臚之曉涙、  
と、高らかに口すさみたる其心中や、そもいかなりけん。今此詩  
を誦して、そゆる思ひ淨べるまゝを附記す。

此篇、猶精練したらんには、一層妙趣に達せん。

阻華曰 未熟の節なきにあられども、又一讀すべし、更に推敲一番すれば  
一篇の好史詩を作すを得ん。

晚村曰 阻華の云ふ如く推敲の足らざるは惜むべし。



歌筆に寄す

神田區淡路町 瀬沼浪花

思ひ亂だるい胸の血は

筆に染むれど中々に

かびしさまさる心とて

遂にはをりき歌の筆。

なやましき身をたへがたみ

幾夜ねざめの人の子が

今日ぞ又湧く新潮に

今し響ける鐘の音に

筆の命毛生ひそめぬ。

「はげめ」と神のみしかりか

野山を越わてうつし身の

詩の調やそへぬらむ。

今更をしき筆とりて

さらば「希望」もわかき身の

春は常世の美はしき

運命に笑みて運命歌はむ。

咀華曰 靈氣こもる、神ある筆、魄ある詩。



紫樓曰 咀華氏に同感なり。

虹

長野 市村とくよ子

あゝ美はしき虹のかげ

薄雲かゝる遠山の

緑をわけて空たかく

白帆流るゝ川に落つ

見れば覺ゆる天の弓

夏のかげをば逐ふとかや

天つ御使立ちまして

希望の征矢をうち番ふ

見れば覺ゆる天の橋

天津み神のみこともて

天つ御使降るとや

下界に望みかけつらむ

はなては絶ゆる弓の絃

渡れば消ゆる橋のけた

あやむる色のやいさめて

見る間に後なく成りにけり

世は波の暗き黄昏の

悲嘆に沈む詩人よ

この美しき影を見よ

涙の雨に虹たつを

柴舟曰 着想清新、而して句々神韻あり、字々生氣あり。  
笠峰曰 何處を如何様に讀めば、柴舟氏の如き讚辭を得らるゝやら。  
咀華曰 我れはしばらく柴舟先生の言に従はむ。

渡 守

信州 成澤きと子

ゆきかふ人を渡しもり

まゆみとりにしものなれば



蘆間に澄める月みては  
かすみに匂ふ花みれば  
忍びぞ出づる今の世に  
うれひの雲のあるみれば  
かはる浮世はあすか川  
昔ながらの束ね髪  
船をあやつる渡守。

かつてひきにし満月を  
金紋輝く行列を  
のりあふ人の面わにも  
昨日のふちは今日の瀬と  
手織布子を身にまどひ  
よる年浪に擢とりて

松風曰 翁の結髪は、天保時代の名残にや。此附近の名所舊跡を尋れん哉。  
咀華曰 優婉の作、幽雅の筆。  
紫樓曰 渡守の心、よくうつされたり。

## 天 長 節

麴町區 高關すゞ子

巷につゝく日のみ旗  
御園にかをる白菊も  
我大君のあれましゝ  
旗さへ菊さへ明らけく  
千代に八千代と祝ふなり  
いさや祝はん諸共に  
君が代祝ふ喜びは

登る朝日に輝きて  
色麗はしく照り添ひて  
今日の佳節を祝ふなり  
光さし添ひ君が代を  
五千餘萬のはらからよ  
いさや歌はん諸共に  
吾等同胞のみならず



京 東 濱 横  
 子 五 ち 岡 辻 子 き り 野 綿



外國人も手をあげて  
 御代長かれと諸共に

戦捷國の大君が  
 今日佳節を祝ふなり

松風曰 閑庭の、菊に蝶舞ふ佳節かな。  
 紫樓曰 菊の佳節、この詩を以たる作者が幸羨むべし。





亡父を偲びて

本郷區西片町一〇 辻岡ちる子

あゝなつかしの父君よ

あはれ戀しき父君よ

今世にまさばもろともに

都の秋もめでましを。

飛鳥の山に瀧の川

錦どまがふもみぢ葉も

なぞてをかしと見らるべき

亡き父君の忍ばれて。

去年の此頃父君と

石山寺の秋とひて

楽しき一日を鐘の音に

送りしこともありけるよ。

去年に變らでかへるての

梢あまねくもみづらん

石山寺はさながらに  
胸の思ひははてしなく  
遠寺の鐘はひいきゝて  
くれなる深きもみぢ葉の  
あはれ寂しき父君の

父君今は黄泉の人。  
涙に袖をしぼる時  
暮靄せまると見るほどに  
ひまもりそめし月影よ  
ねくつきあたり照らすらむ。

匪華曰 平凡なる筆なれども、痛恨の迸れるを見る。

笠峰曰 たゞ情の痛切なるを取る。

晩村曰 われも亡き父を忍びて筆かむものを。

松風曰 情緒纏綿、紅涙潜々たり。

野 菊

久留米 黒岩 春子

まぐさ刈る子にふまれつゝ

鄙の少女にむしられて



あはれ榮なき野菊かな  
ゆかし姫君歌人に  
されど田舎に生ひ出ては  
あはれくあゝ野菊  
神のたれます運命よ  
けがれにそまぬ自然をば  
露のなさけに日のめぐみ  
愛でなん人はよしなくも  
我はなれをば友として  
都は塵のちまたとよ

都の中に咲きもせば  
かざしよ歌よと愛られん  
あはれとめづる人もなし  
さはいへこも又運命よ  
鄙のこなたに生ふるとも  
友と親しみ交りて  
心にかゝるくまもなく  
なげくな野菊なげくなよ  
心のかぎり愛なまし  
浮世をよその此野邊に

心を静に汝と我

廣き自然にやしなはん

紫樓曰 作られたる花の麗なるより野の花の淡掬すべし  
咀華曰 『澁り上手で咲かせたよりも、一そ野末のみだれ咲』此の想、今少し  
く筆を略して、餘情あらしむるを得べかりしに  
松風曰 野菊を愛するの吟、清雅皎潔。ゆかしくも詠まれたりな。

夕 づ

夕映うすれてほの暗う  
微妙のさとしつぐるごと  
亡き母上のひと七日

信州上伊那郡小野村 撫 子  
嵐にひいゝ暮の鐘  
思出多き秋なれや。  
香のか高き室のうち



もだしの影は破られて  
我めされぬと勇ましく  
武装たちなくとゝのへて  
朝風寒う別れしか  
虎ふす野邊にうまゐして  
くまなく輝す月かげに  
大君のため國のため  
命はかるきもの乍ら  
露營の君を偲ぶなる  
さもあらばあれ山櫻

とよめき立ちぬ夜深きに。  
笑かたむけて兄上は  
さらば頼むの一こゑに  
花ちり紅葉またかれぬ。  
夢おどろかぬ武夫も  
故郷の空を思はずや。  
捧げまつりし武夫の  
胸にしみ入る夜嵐に  
こゝろは一人我のみか。  
匂ふも今日ぞ散るもけふ

ハルピン城頭吹く風に  
かちごさあげんみ軍の  
聞き給はずや星よ君  
正義のためのみ軍を

朝日の軍旗なびかして  
幸多かれとたい祈る。  
まもり給へや星よ君  
忠と勇との兵士を。

阻華曰 真情の詩、

松風曰 み空の星は、之れ摩利支天か。我が義勇兵の爲めに幸あらせ給へ。

### 浮世のさが

(こは去月高岡中學の生徒なる  
福岡の青年のこゝに御座候)

黄金も玉も白金も

越中福光町 浅田 こと子  
しくべきかはと朝夕に



なで、育てし一人子は  
いと健やかに生ひたちぬ  
わきてめてたきいさをもて  
村の學びやをへし春  
ゑみかたふけて中學に  
通ひそめしは五年前  
卯の花くだす雨の日も  
木の葉ふきまく風の日も  
あだに過さで朝ゆふべ  
只一すぢにはげみたり



されば數あるその中に  
その行ひもめでたしと  
師にも友にもめでらるゝ  
父と母とのうれしさは  
來ん春こそはかくはしき  
めでたく家に歸らむを  
ささくありてよまさきくと  
神に佛にちかひては  
匂ひし花はちりすぎて  
彼は語りぬ打ゑみて

學びの業も人に越は  
特待生にあげられぬ  
あはれ賢しきいとし子よ  
そもや何にかたとふべき  
月の桂をかざしつゝ、  
あゝその折はいつなるか  
夢にうつゝに夜に晝に  
祈るぞ親のまことなる  
青葉茂れる夕まぐれ  
きかせ父上母上よ



あすはうれしき學びやの

年に一度の樂しき日

ボートレースのその日にて

我は撰手にゐらばれぬ

日頃手練の楫取りて

腕前しめさん時は今

みませたらちね去年のごと

一等賞を得てぞ來む

あなよろこぼし明日の日よ

雨もなふりぞ風なふきぞ

とくも今宵の明けよかし

朝日よのぼれ鳥ぞなけ

鳥は林に囀りて

日は山の端にさし出でい

いとし一人子いさみ立ち

軍歌に今朝は出でゆきつ

ゑみて送りしかぞいろが

あふぐみ空はやうくくに

雲たなびきて風ふきて

やがて雨さへふりいでぬ

あなうれたしや意なの

空よと恨む折からに

一聲高く電報と

さけふはいづこひが耳か

見ればこはそも何事ぞ

シゲサトシスの六つの文字

夢かうつゝかまぼろしか

およつれことかたはことか

くるひに狂ふ風と雨

音すさまじき庭の面の

あふちがかけに時鳥

血になく聲も身にしみて

咀華曰 全體の結構此の如くそれ精密にして、何故にその天死の理由に一句の及ぶものなかりしや、筆は淀みなければ、抑揚の妙は求むべからず。

松風曰 正に是れ一青年の小傳記、悲哀は全く天死にあり。結末、郭公を點出して落涙に堪へざらしむ。



白菊賦

尾道市 有元光子

いつの神代に神の子が  
姿やさしくうち薫り  
ひるは胡蝶の尋ね来て  
舞ひて日脚のみじかきを  
あはれわが友この夕  
しら菊匂ふ我園を  
清き心の色としも

まもりうるつる花ならん  
ちりにけがれぬしら菊よ  
羽袖かるげにむつれつゝ  
かこちかほにも夢とめぬ  
月をふみつゝ訪ひ來しか  
赤き紫いろはあれど  
この世の人にめでられて

露たきまどふ朝にも  
われもならはん此菊に  
天の女神や宿かりて  
月に一しほほゝ笑みて  
清きその花清き露  
千代の薫もいや高く  
よし木枯のすさぶとも  
姿なあせぞ香もともに

操かへぬはこの菊か  
萬籟静けき秋の夜半  
契結べる露の玉  
うらなつかしや白菊よ  
世の紅塵に染みもせで  
御代の榮にも見ゆる花  
よしや時雨にうたるとも  
姿なあせぞ香もともに

松風曰 月夜菊園を訪ひ來し友に、晝間胡蝶の舞ひし花辨を教へられよかし。友は淵明詩集を携帶せりや否や。



平 和

秋田 宗形ふみね

こは上中下の三篇より成る四百五十句の長篇新體詩中、中卷の一節(平和の家庭)を抜きとりしものにて、三十六年師走より、本年の春にかけ、書きこ  
いるみし、色も香もなき作なれど、いたづらに匣底に秘めおかんも、せん  
なきわざと思へば、貴重なる本誌の一隅をかりて、世の人々の高き教へを  
乞ふこそいはなしぬ。

夫「雲を彫り濤を刻み

灯火光るたかどのに

袂をあげて軽くたつ

三千の舞妓擁しつゝ

三絃きゝて酒を汲む

豪奢も今は望まじな。

いかに廂は傾きて

馬なす糧の糠飯に

僅かに餓を凌ぎつゝ

つゝれを纏ふ身なりとも

汝をし見れば我心

富にもまさる思ひかな

楽しいかなや草を蒸す

眞光り白き夏の日の

青葉蔭なす我庵に

二人が風を迎ふとき

塵うづ高き都なる

豪奢も我は羨まじ。





あゝまどかなる我戀の  
浮世はあらし潮ならず  
むれ居る鳥に道とひし

かくて消えざるものならば  
雲や泉を友として  
昔の身にも優るかな。

妻「いばらの世路になやみつゝ、人となりたる我をしも  
かくまで深くいつくしむ

君が情ぞ嬉しきや

あゝ如何なればかく我は

幸ひ多き身なるかよ。

世はさむ空に寂しくも

平和の恵み暖かく

思ひたもはれ鴛鴦の

流れに浮ぶ妹背川

君だに心かはらずば

分るゝことのあるべしや。

それ春の日の朝がすみ

姿は見えず高空に

雲雀の歌のきこゆとき

君が好みの四つの緒の

琵琶の調べを我きけば

心うれしく覺ゆなり。

又は弦月西空に

喘ぎ瘦れて沈むとき

花散りはてし青葉かけ

君が笛の音きくときは

心嬉しく袖かみて

獨りほゝるむこともあり。

笠峰曰 「春の日の朝がすみ」にも似たるうら若き戀が、圓滿に永遠に成立  
持續すれば多倅なりさいふべし。我れ未だこの詩を評する資格な  
きを悲しむ。措辭は取るべき節多し。作者乞ふますく、勉めよ。

咀華曰 我れにかゝる妻もかな。惚氣たつぶり！

松風曰 平和なる家庭を作るは、人生の最大幸福と謂ふべし。家庭平和な  
れば富貴も何ぞ羨むに足らんや、貧賤も豈悲しむべけんや。心平  
に意舒れば其樂み愉々たり、ゲーブルの言に曰く「我が家内の嬉  
笑は、實に秀美なり。互に心の底を知れるもの、相見るとは實に愉



快なり。純潔なる愛情の充つるや、屋内の邊隅に存する歡喜も凡て純潔なり」と。

此一篇、清婉喜ぶべし。結末油繪を見るが如し、溫雅の調。

## 古 戦 場

静岡縣濱名郡中郡村万解一五 長谷川瑞枝

つゆとはかなく消ねやすさ もののふの身ぞあはれなる

此處も名だかき武夫の 露と消ねにし桶はぎま

昔しのびてたくつきに 野なかの清水手向くれば

千草にすだくむしの聲 松にさびしき風の音

あはれ雄々しきつはもの、 まめなる志を致さんと

君に命を打捧げ

夢冷やけく眠るらむ

みねの嵐にまつかぜに

遠山寺の鐘の音の

むなしく朽ちて土の下

苔むす石に名を止めて

あはれをそふる夕まぐれ

あゝ悲しくもひいくかな。

咀華曰 鬼氣人にせまるものなし、此種の詩題甚だ面白くして、甚だ歌ひ

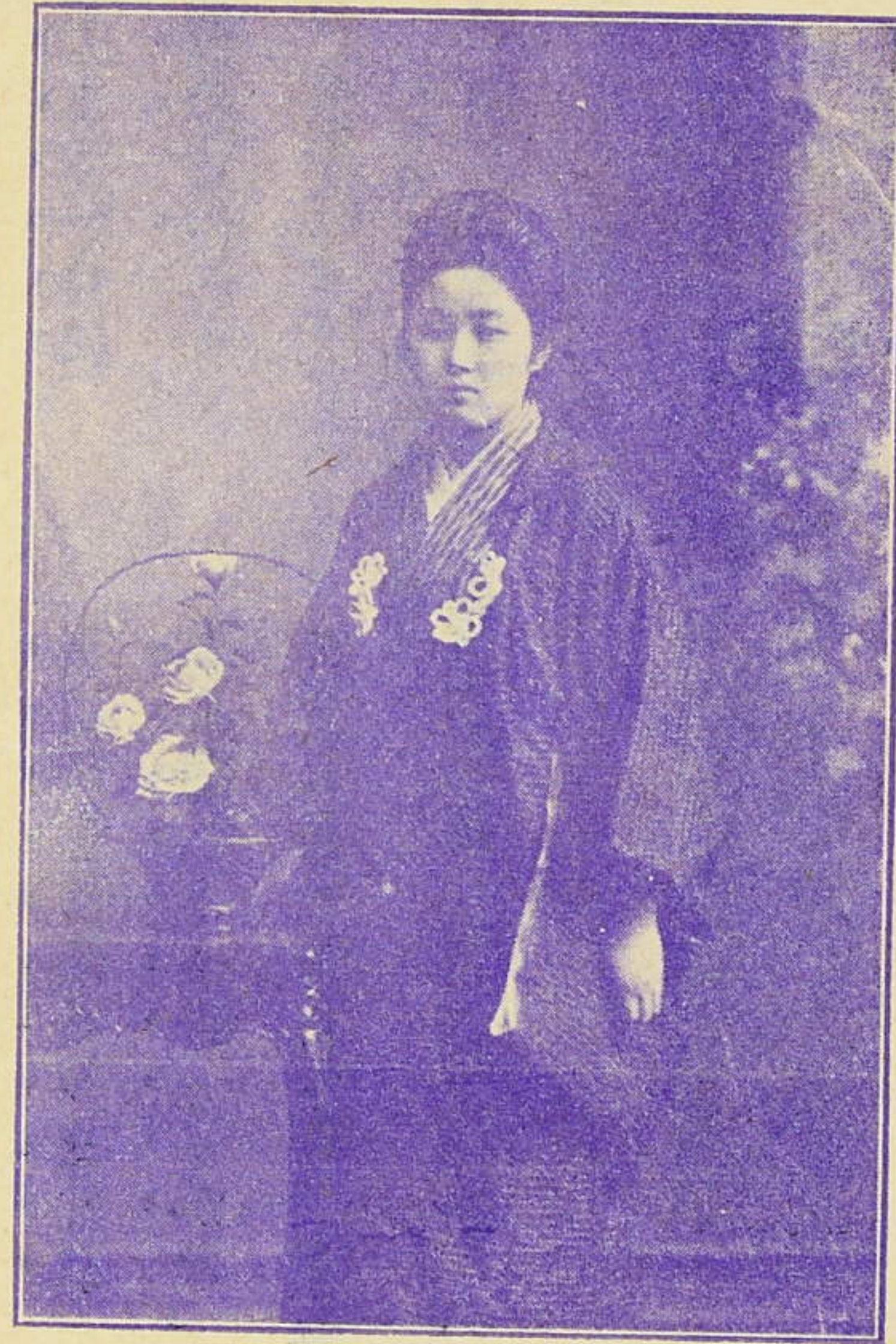
がたきもの、初四句最も拙劣。

松風曰 あたりに手向くる草花もがな。鬼哭啾々。





東 京  
入 江 孤 舟



# 胡蝶の夢

東京入江孤舟

一

若葉そよぐ春風の  
梢の鳥のやさうたに  
水のしらべに浮かれては  
花にあこがれ露に酔ひ  
胡蝶の夢はもろかりき。

二

誘ふがまゝに立ち出で、  
ゆるく流るゝせゝらぎの  
我が世の春とはこりつゝ、  
げにあたいかく結びにし



昨日野の邊にとびかひて

露をあさりしその花も

己が立舞ふ其さまを

うたひし木々の鳥の音も

影さへとめぬ野の姿

世はとこしへに春ならず

嗚呼夢さめし蝶ひとつ

やれしつばさも力なく

東にかけり西にとび

あされと今は夢のあと

夜半の嵐ぞつらかりき。

咀華曰 やさしけれども、つよからず、美しけれども、重からず。

紫樓曰 咀華氏の言、當らずと雖、遠からず、されどこの作者の筆のびたるはうれし。

松風曰 清絶雄健、今の世に莊周のあらば以て謳ひ聞かせんかな。

行く春

林 つた子

霞める中に咲き匂ふ

麓の花は散りうせつ

軽く羽袖をひるかへす

小さき蝶や今いづこ

あゝ陽艶の春ゆきて

淋しき色の世となりぬ

たか手をかりて佐保姫の

花の御車とゝめてん。

咀華曰 結句の優を以て全篇の拙劣を補ふ。

松風曰 結句奇想、全篇を活動せしむる力あり。



新年

東京 椎野榮子

不二の高根の初日の出

羽がひにうけて大空を

友呼ひかはし田鶴ぞ舞ふ

浪静かなる四の海

八洲の雲も治まりて

千年を松にふく風も

枝をならさず長閑なる

此大御世ぞ類ひなき

長閑なる世に逢坂の

せきの清水の濁りなき

國のたきてに浴しつゝ

一樹の梅の其の下に

住ふ樂しの家一つ

障子に花の香をうけて

畫圖一幅の室のうち

をしき圍みて父母も

兄も妹も弟も

笑みつゝくむや屠蘇の酒

父は言出てぬるましげに

いざことほかん今日の日を

苔むす岩根うこきなき

御世を祝はんいざともに

はらからひとしく君か代を  
いと清らけく歌ふとき

母は抱ける乳のみ子は

今日を始めに笑みてけり

父も此上なく喜べば

兄はすりより抱き上げぬ

はては一家の笑ひ聲

愛のみちたる家の中

江風曰 白梅枝下の一小屋、これ亦新春の瑞を迎ふ、樂興愛すべし。

咀華曰 初一段、さなから謠の文句。われはその古きをこらす、中段より  
平凡、冗漫。



笠峰曰 平凡なるが如くにして凡ならず。新年また平凡なるが如くにして然らず。新年の詩としては先づこれ位のものゝを以て佳とすべし。  
紫樓曰 新年の興あふるゝが如し。

## 夜半の夢

東京 はなみ女史

空行く雁の聲、  
空行く雁の聲、  
落葉を誘ふ風のおと、  
衣片しき獨りぬる、  
嘗ては笑鬢匂やかに  
見せつゝ過ぎし其頬も

虫の音細き軒近く、  
身にしむ夜半の閨のうち、  
まだうら若き人の妻。  
契りし人に朝夕に  
思ひにやせてはつれ毛の

亂る、胸はやるせなく  
庭の若葉の露ふかく  
から山たろし如何ばかり  
夜べ編み上し靴足袋も  
やをれ吾妹子聞けよかし  
心づくしのくさくも  
見よとて示す益良雄の  
あな背の君とよりそへば  
息つく度にほとばしる  
残燈暗きまくらべに

魂は唐野に走せて行く。  
衣手さむきさのふけふ  
み肌、強くしむならん  
肌着もあすは送らばや  
汝がやさしき手に成りし  
受くる甲斐なき身となりぬ  
脇腹染めしあけのいろ。  
見るまに色の蒼ざめて  
血に驚きて眼さむれば  
通ふ小雨の音わびし



笠峰曰 あまり架空的にして、感興起らざるは、詩としての價值も少なきものさ知り給へ。

咀華曰 巧みなる詩なり

松風曰 若き妻君の魂は唐野に走せて、心細き思ひの糸に編みあげし靴足袋、未だ送らぬ夜半の夢に見たる状、悲壯慘憺。夢さめて殘燈に通ふ小雨の音に、一層哀寂の情を覺ゆ

## 新年の海

大阪 岡 秋子

憂、悲、煩ひの

夢のさゝやきあと絶えて

年の緒さけし日の神は

今大海をはなれたり

燦とかくやくその姿

何にたどへむものぞなき

昨日の苦しき今日の快樂

波の子無絃の琴をかなで

明けゆく空を迎ふるよ

雲は眞紅に流れたり

流るゝ光大空の

果てより果てを韻はして

去年の明星かすかに

またゝく様を君見すや

一と日といへば云つべし

天地の曆新潮の

しぶきに春を輝かし

思ひ切なる人の子を

快樂に導く境なり

「時」の白矢を背にのせて

頭もたぐる大波や

誰れか思はむ暗の夜を

帆柱折れて沈みたる

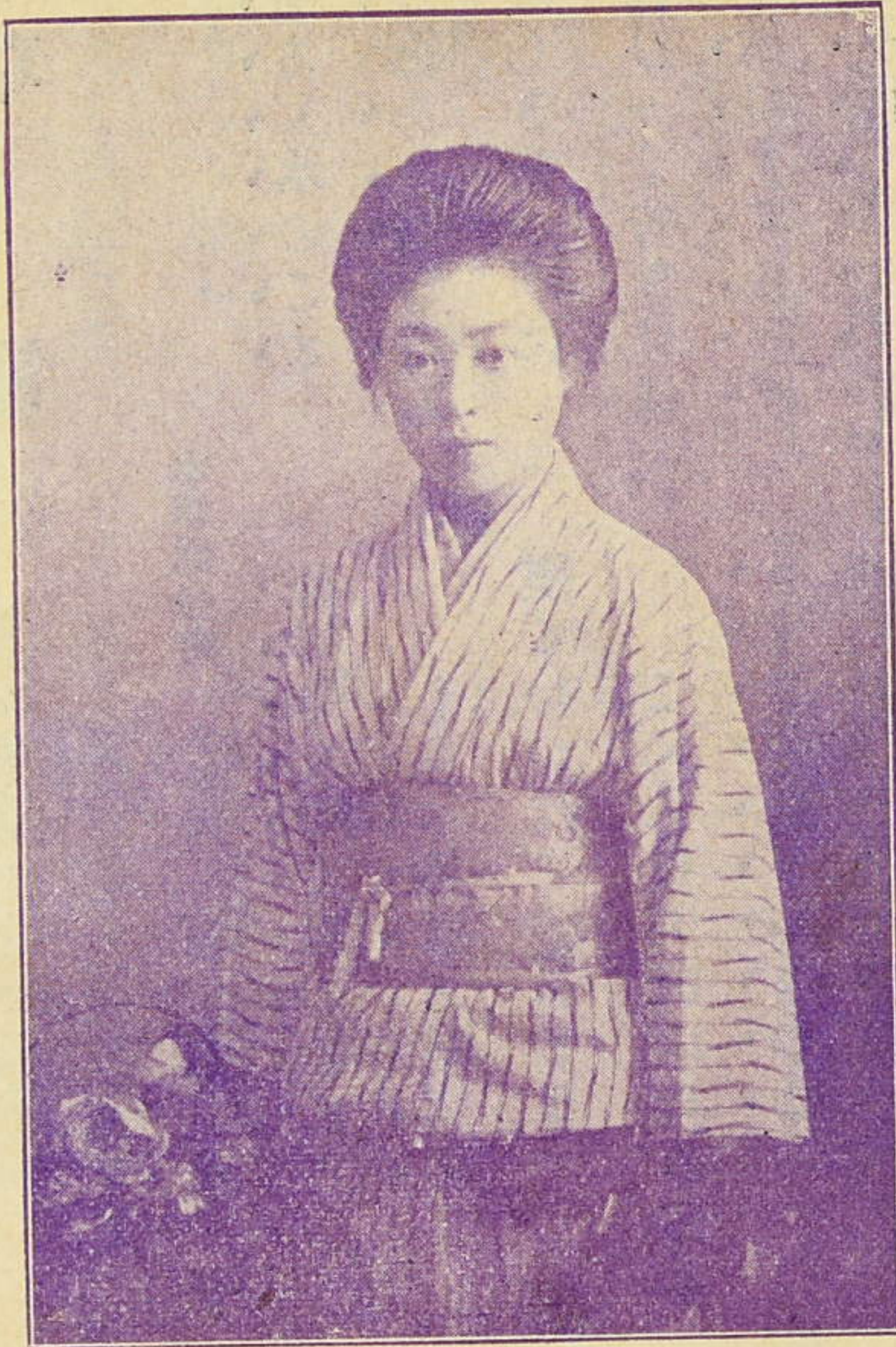
人の叫ひを新らしき

希望さゝやく此の海に

全帆一つひんかしに



東京 石原露子



闇に別る、陸さして  
初陣姿さながらに  
憂かなしみ煩ひの  
年の緒さげし日の神は

恰も騎馬の若武者の  
行くや真紅の春の海  
夢のさいやきあそたえて  
今大海をはなれたり

柴舟曰 雄渾莊重、而して詞源混々として盡きざる慨あり

江風曰 壯快なり豊富なる詞想寧ろ驚くべし

咀華曰 雄大の詩、大分晩翠にかぶれ給へるかな

笠峰曰 雄渾か冗漫か、われ之れを知らず

晩村曰 雄大なれど修辭いまだし



草 笛

本郷區弓町一ノ廿六 石原露子

ゆるい流るい水のこと

松にさいやく風のこ

ゆるき節あり高さある

いらべ妙なる草笛や

春うるはしき花かげに

蝶とむつれて遊ぶとき

幽かにひやく音きけは

こゝろは天にのほるなり

ふけゆく秋のうす日かげ

うすき運命をかこつ時

細くすみ行く聲きけば

心はいと沈むかな

春も小春も朝夕に

小牛引きつゝ童べか

野末にすさぶ草笛ぞ

もてあるぶらしわか魂を

柴舟曰 情景あはせ臻る、最後の句最も力あり。愛誦すべし

阻華曰 柴舟先生の評つくせり。幽遠高雅、三讀妙味ふかし

晩村曰 草笛はよく歌はれて、よき詩なき題なりこの詩すらくとして無難の作なり、

あはれ君

薩摩中島竹子

朝日の光うらゝかに

霞み渡れる春の野邊

若くさもえて花咲きて

吹く風ぬるくにほふとき

菜の葉にとまれと歌ひつゝ

狂ふ胡蝶を追ひながら



何心なく手を取りて  
みどり涼しく茂りあふ  
螢亂れてつゆちりて  
み親のちきり其まゝに  
千代の松原千代かけて  
千草八千草花さきて  
蟲なきそめて霧みえて  
明日と千里の海遠く  
名残をしみて諸共に  
落葉の外にたとづるゝ

遊びたりしも君なりき  
小川の岸の桃のかけ  
流れほのかにくるゝ時  
やかてはつまよ夫よと  
契りたりしも君なりき。  
錦あやなす庭のたも  
月の光りになれるとき  
隔てんことの悲しさに  
袖ぬらせしも君なりき。  
友もあらざる草のいほ

木枯やみて雨やみて  
胸に餘れる思ひをば  
我玉章に封じこみ  
あゝ春去りて秋去りて  
待ちにし甲斐もあらし山  
花のあしたも月の夜も  
いとゝにぬるゝ我袖の

燈かすかにふゝる時  
ひとりつゝむに堪へかねて  
送りたりしも君なりき。  
歸り來ますも程なしと  
櫻と共に散りはてゝ  
昔の夢をしのばせつ  
涙の主もあゝ君よ

江風曰 美しきしらべなり

照華曰 作者の眞情は推知するに難からず、されど單調にして幽韻の切なるなきは、筆の及ばざるが故ならむ、幸に力めたまへ

笠峰曰 すらくと言ひ得たる所、賞すべし、あはれ君にさぞや



## 勇士の妻

麴町區四番町 森 田 孤 芳

月は凍りて風寒し  
戦地にゐます我夫の  
乳こふちごも父君の  
さわがすなりてたとなしき  
君とみ國のわざはひに  
涙もみせず雄々しくも  
やしらの前とはいそみし

いざやともし火かきたて、  
ころも仕立てんこのよさに  
家にもまさすなりしより  
心のはともあはれなり  
忠と愛とに身をさゝげ  
又の逢瀬は靖國の  
かの勇ましの面影も

いまはやつれてありぬらん  
いまはみ國の春立ちて  
やゝ咲きうめて見ゆれ共  
すねをうつむる泥路に  
數里の外はいでずとや。  
思ひになやむ冬のよは  
またも針をば運ぶとき  
かねて覺悟はきはめしを  
さらばまつらむ亡き靈を。  
やがてはともる佛壇の

かたきみさをの梅の花  
韓地の雪はなほふかく  
ひねもすつとめ歩みても  
すきもる風に肌寒み  
しらせはつきぬ討死の  
今更何をなげかなむ  
あかしの影のいとあかく



みどり色こきわか楓  
合せて拜むをさなごの  
悲情の雁のこゑとほし。

それにも似たる双の手を  
玉のなみだの露こほり

父の逝けるも知らずして  
をさなき夢は勇ましき  
やれし窓よりうすれ月  
心のたもひうつるとや

床にすやくねむる兒の  
馬上の父にかよふらん  
さし入る光も亡き人の  
燈明の火かげうち曇る

咀華曰 「さわがすなりて、おさなき御尤も千萬。あまりよき詩にあら  
ずと思召せ。」

松風曰 此一篇、句々皆涙より成る、後半最も婉曲巧緻、かくて形見の愛  
兒は、是れより慈母が手に人さならんかな。

紫樓曰 松風氏の言つくせり

## 天 長 節

久留米 藤岡はな子

東の空ののどけさや  
うらく登る朝日かげ  
山の紅葉も染めつくし  
籬の菊も咲きいで、  
一家團樂睦まじく

紫雲遙かに棚引きて  
聖き御代を照すなり  
祝ふに似たり今日の日を  
祝ひ顔なり今日の日を  
めぐみの光仰ぎては



ほぎ酒交ほす盃に

笑のこぼれて浮ぶなり

いでや歌はん大君の

千代に八千代を祝ひつゝ

紫樓曰

千代だの八千代だのを並べたてたのみで、祝ひの歌が出来ると思ふは非也。詩はよろしく詩化せざるべからず。

咀華曰

さなり詩化せられざる詩は詩にあらず。

松風曰 満山緋帛を舖きて、籬邊黄雲芳し。歌へや今日の天長節

### 渡 守

高 知 竹 村 義 子

頭に雪をいたゞきて

額に浪はたゞむとも

風の吹く朝雨の夕

人の望にまかせつゝ

水馴棹さす老翁の

其の古はいかなりし

けがれし物よ世の中は

それよ薔薇の如くにて

色香は妙に見ゆれ共

うらに針もつ人心

浮世の海の荒波に

もまれて今は世をすてぬ。

佐野の渡にたゞ一人

葺屋營み安らけく

春は岸邊の花をめで

夏は川邊の月に漕ぎ

秋は紅葉を友として

冬は雪をばあはれまむ。

朝は早く夜はたそく

たいひたすらに櫓を押せば

塵埃深き都にて

名利をぬんとあせりにし

其古への愚さを

今は笑ひて暮すかな。



咀華曰 好個の詩材、凡庸の詞調、今一段の洗煉を望む。  
松風曰 深智にして私曲なるは、至愚にして至直なるに如かず。怡然として天然を樂む渡守の心中、清廉純潔、羨むべし。

銃 獵

深川區猿江裏町 篠田ころも

鳥もいのちや惜しからむ 獸も身をやいとふらむ  
山にうまれて山にすむ かり人ならで玉敷の  
都に住めるわかうとの ことさら銃をせにおひて  
やまに谷間にかりくらし 身をなぐさむるは何事ぞ

子を失ひし親鳥は いかになげきに沈むらむ  
親をうたれしけものらは いか悲しく思ふらむ  
その悲みも覺はぬす かのなげきをもかへりみず  
狩ひとにしもあらなくに 日すがら山につゝうちて  
捕りし山どり山うさぎ 都の家に持ちかへり  
親子はらから打つごひ 今日ありさま語りつゝ  
味はふ心ぞうたてきや

柴舟曰 奇趣なしと雖も穩雅なり  
江風曰 これも様々の人こゝろ、さりさばいつ迄もうたてき世かな  
晚村曰 好詩題、只作者の意を推敲につくさゞりしを惜む  
咀華曰 否、平凡なる想をかりたるもの、如何で高雅の詩をなさむ。



廣 和  
島 知  
子 廣



ゆ  
く  
春

廣島市國泰寺村 和 知 廣 子

地 上 に し け る 花 び ら の

い ま は と 暮 る、こ の 春 を

松 に か け る ふ じ な み も

日 と と く に あ せ 行 き て

草 の 庵 ぞ あ は れ な る。

ふ た い び 枝 に か へ ら じ な

止 む る か の わ れ に な き

池 に う つ ろ ふ 山 吹 も

音 も し づ け き 夜 の 雨

紫樓曰 君が詩なる草の庵に、まためぐり來ぬべき春の心を、君が筆にう

つくしの詩をなしたまへ、

咀華曰 往く春は静かならざるべからず、



晩村曰 いま少し滋味ほし、  
咀華又曰 蕪村句あり、『行く春や選者を恨む歌の志』此作者感如何。

夕川

信州玉村高子

草屋もる煙幽かに  
牛引きてかへる番の  
翁ひとり汀にをりて  
紫のゆるぎ流れに  
からたちの垣になびきて  
後より日は暮れんとす。  
鍬洗ふ河末けぶり  
眞珠なす月はすみたり。

塵はあらぬ端山の里に

現身の此の身をよせて

世の波にゆられし胸の

亂れさへ今は和きたり。

夢心地今日も現も

いつか又醒めて思へば

かの月のかゝるゝまでは

此まゝにせめて歌はむ。

江風曰 清韻掬すべし。

笠峰曰 清新流麗の筆愛すべし。

咀華曰 卷中多く得易からず。

遊子

栃木黒澤宗子

山うるはしき故郷は

いく夜の夢に通へとも



情あふるゝたらちねは

幻にのみみゆるなり。

やまは昔の山ならず

家やはものとの家ならず

かつて笹舟ながしてし

野のべの水も濁りたり。

山けづられて水けがれ

友ことくくかへりこず

しる人まれにうれさへも

なさけの程はうすらぎて。

れもむきありし朝夕の

うすき烟のそのかみを

しのぶにつらき遠里や

瓦斯のけむりぞ空にみつ。

かたみを植ゑし松の木は

人の門のべに緑こく

かはらぬ色にしげれども

われにはつらき思出よ。

わか里ならぬふるさとよ

かへりゆくべき里ならず

親もなき身の二十年を

うらぶれはてし我身なり。

旅路のはてはわれしらず

さしもつらしと覺わざる

途のゆくての何處にも

安き墓場はありぬべし。

うるはしき山清き水

たのしき夢とかよひきて

昔かはらぬたらちねの

やさしき前にまみゆれど。

ゆめぢの果を思ほへば

さすが涙のせきかねて

衾つめたきいく夜さの

旅寢の月はくもるなり

江風曰 惆悵の情、流達の筆、誦しゆきて情趣限りなし。

笠峰曰 故園を偲び今のわがさまを嘆く情、遊子の感慨そゝる同情に値するあり。されど唯徒らに泣いて悔むも詮なきことぞかし。

咀華曰 暢達の辭乎。



晩村曰 同感

ゆく春

丹 後 栗 山 陶 子

山見れば

梢の花の散りはて、  
青葉色そふ様見れば

深き霞もや、消えて  
徒にゆくはるならず。

川見れば

山吹のせは移るひて  
花の流る、様見れば

井堰打越すしら浪に  
徒に行くはるならず。

野を見れば

董たんぽ、色あせて  
昨日にも似ぬ様みれば

一夜寝なんと思ひしに  
徒にゆくはるならず。

岡見れば

艸はいたくも立のひて  
雛も巢を立つ様見れば

雉子の聲もたは果て  
徒に行くはるならず。

紫樓曰 ゆく春はやさしき詩題なり、この詩あり見るべし、

晩村曰 取材の散漫なりしはさらず、

咀華曰 徒らに捨つべき詩ならず、



泉 和 見 驚  
以 せ



## 夜半の鐘

大 阪 盛 田 せ い 子

愁ひに沈む鹿の子の

魂翼得て水甘き

華胥のみ國にいらん時

長きこの世の旅をへて

罪のほだしのとくるとき

希みの星の影消えて

むくろの石に化らむとき

緑なき人の死に泣いて

吾が世悲しと悟るとき

響く夜半の鐘きけば

救世のみ經の朗々と

迷ひの雲の間より

泉の如く湧きいづる。



今現世の夜は更けぬ  
深く眠りぬ子の爲めに  
歌ひきかせん高らかに。

聖靈の領と世はなりぬ、  
疑惑とかむ吾が歌を

土より萌わし草なれば

土にかへらむさだめなり

人もし墓に水撒くも

涙に袖をかむなかれ

雪はまじらん風寒く

壁をもれ来て枕上の

火影幽かに流るゝに

山寺の鐘猶鐃々たり

柴舟曰 これまた神秘的他人道破せざる所。  
紫樓曰 柴舟氏の言つくせり、

### 蛇

土佐 秋月廣江子

如何に高きに仰ぐども  
如何に低きに窺ふも  
花こて近く寄りますな  
葉蔭に蛇は潜みつゝ

天の秘密は知り難し  
地の秘事は知り難し。  
清けき野邊も危きよ  
残酷の眼みはるれば



若し夫れ君を見とめんか

稻妻の如走りより

毒の息吹をそゝぎかけ

君を倒すの力あり。

君が身如何に勇あるも

君はた如何に智ある共

其智其勇葬りて

遂には彼れの勝つぞかし

怪しからすや古くより

益なき蛇に正義ある

人の子倒す劍をは

み神はなきて授けにい

如何に高きに仰ぐとも

天の心は解き難し

如何に低きに窺ふも

地中の謎は解き難し

紫樓曰

思ふ處ありて君この一篇はたたまひしなるべし、青春の領、蛇の美を語る者果して幾人かある。

晩村曰

蛇を好む人、必ず虹を好まむ。

### 渡 守

上田桂子

のどけき春の櫻狩り  
月になりゆく入相の  
家路に急ぐ諸人を  
つどの花びら散るを見て

夕日こぼるゝ花かげも  
鐘の響に誘はれて  
渡して返す舟の上に  
何をか思ふ渡し守

咀華曰 此の風流爺、歌を詠むや否や、棹聲霞の中にあり。

笠峰曰 小學唱歌集の「鏡なす」より想を借り來りしに非るか。

松風曰 詞艶にして意遠し。



折にふれて

山梨松葉

後に山はいや高く  
望みて立てる茅屋あり  
落葉亂る、初冬の  
いつも淋しとかこちつ、  
雨や風さへ通すらん  
翁と媪と新妻と  
貧ましき内にも睦しく  
前には清き笛川を  
片山里の秋深く  
淋しき時をその上に  
なわの戸ぼその屋根荒れて  
このうらぶれし伏屋には  
幼き乳兒とたゞ四人  
細き煙りをたてにける

翁は六十七とかや  
二人が中に男の子あり  
和氣洋々と送る内  
春花の三月十日の日  
幸か不幸かわかねども  
この山里の山賤の  
とばかり匂ふ日本の本  
勇氣凜々勇み立ち  
住める荒鷲醜草を  
家は貧しく父母は

媪、六十三とかや  
妻をのとりて孫を擧げ  
頃は明治の三十七  
翁が一人男の身にとりて  
賢こし君が御召とや  
子とても功は立てざらん  
益良猛夫と仰ふかれつ  
かのシペリアの廣き野に  
刈りつくさんとは云ひながら  
老いたる上に妻はまた



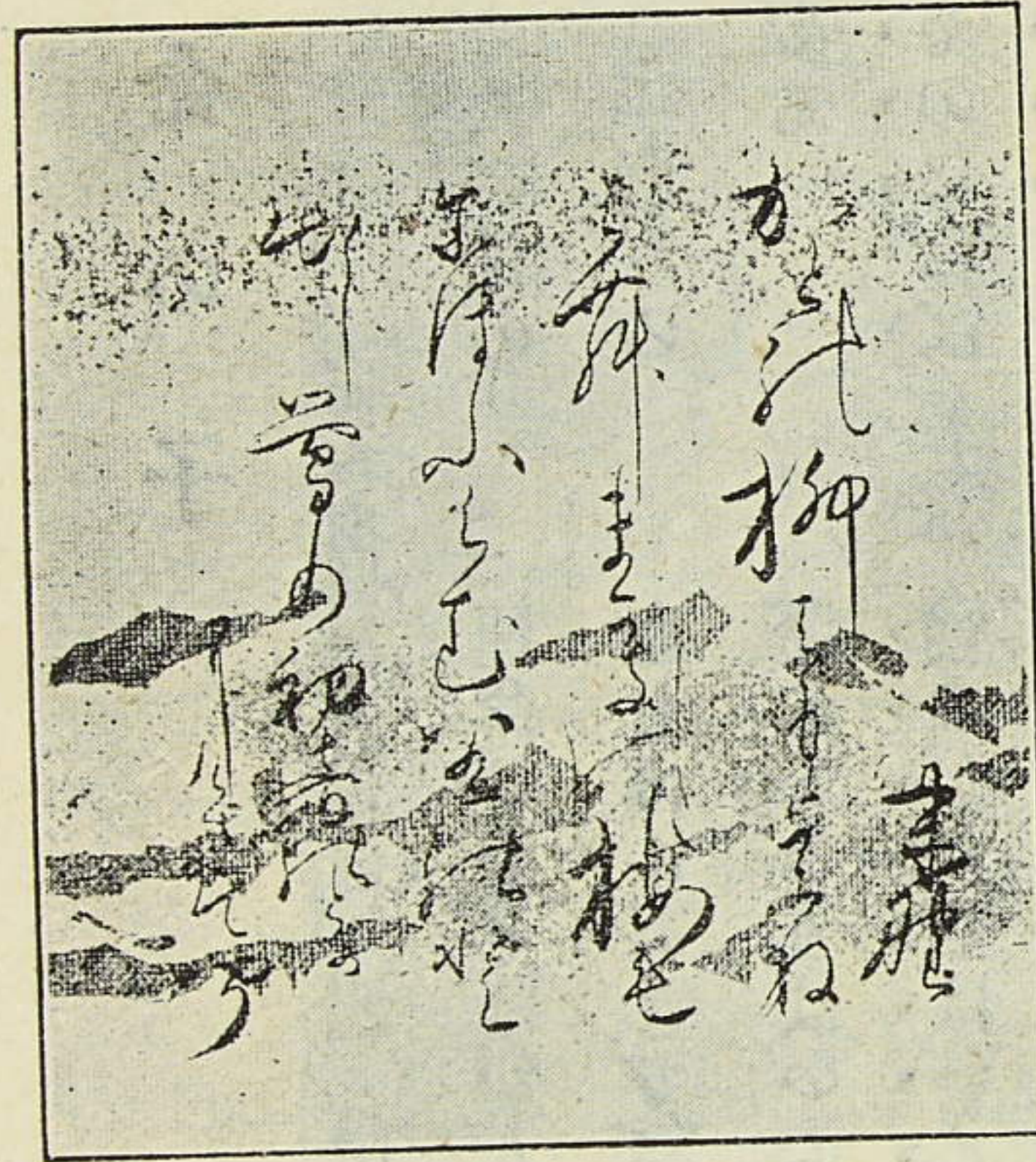
あはれ病の床に臥し  
 父の出陣はゆめ知らず  
 今日より斬りに行ますと  
 出で行此身は満洲の  
 覺悟にあれど如何せん  
 父母は老いまし子は餓に  
 この一言がかりそめか  
 知るよしもなく産生の  
 萬歳の聲は湧き出てぬ  
 心はもはや西の野を

されどいとほし幼子は  
 いでとゝさんはロスキーを  
 云へどいとほしるみて居り  
 露と消ねんはもとよりの  
 妻の病は怠らず  
 泣くをふり捨いざさらば  
 とはの別れか神ならで  
 森に集へる村人の  
 思ひは故郷に残れ共  
 踏みあらしつゝ迷ふなり

いでとくゆかん西の野に  
 さらば村人よいざさらば

かるき此身を捧けついで  
 故山の雲よいざさらば

松風曰 後半、武夫首途の條は、勇ましくも亦めでたしや、あはれ戎衣の袖に月さゆる夕、夢は遠く故山の父母妻子の上に通ふらん。





# 運命の子

大阪市南區難波稻荷町 池田 静子

うきもつらきも人の世の

運命とこそは知りぬれど

あはれいとしき手弱女の

血しほにあきて高殿に

眠れる鬼が春夢も

運命とこそはいふべけれ

ぬれて色ますものなれば

袖のしづくはいとはじと

愁雲多きあだし世に

ひたすらはげむ手弱女の

やせてか細き其身をも

運命とこそはいふべけれ

あゝ大空に月さねて

悪魔の影の低き時

大池 田静子





運命になやむいとし子よ

希神の影をたづね見る

あゝ大空に風あれて

私慾のまなこか いやける

なびく尾花のそれのごと

あゝ弱き名よたをやめよ

希望の光りほのめかし

れなじ有情のあるものを

魔さけぶ聲のたかき時

悪鬼の笑をとく見れば

やさしく強くよわせよや

咀華曰

晦澁の文字、調を害するもの一再に止まらず、此の詩の大成せるもの我之を晩翠に見る、晩翠の詩を眞似びて、百歩千歩の初程にあるもの、我之を此の詩に見る、力めて達するに近づき給へ。

松風曰

薄命なる情詩は、いつも可憐に承りぬ。

### 戦利品

葉ざくら渡る朝風に

靖國神社に詣づれば

あはれこの旗此砲は

命にかへし品なるぞ

勝し便りに酔はてい

うちに幾多の熱涙の

袂ふがせてほど近き

そらるに感の深き哉。

忠勇無二の益らをが

妻子に代し品なるぞ。

うれしと喜ぶ戦利品

有と知すや世の人よ。

麴町區 加藤安子

紫樓曰

「鈴なり渡る朝風に號外買ひて茂り居の春の靜を占め居れば鳥のなく音に興高し」



匪華曰 整はざる詩、格調は寧ろ滑稽に近し。君の平常の作に似ざる何ぞ此の如きや。

## 納豆賣

小石川區柳町 稻 吉 貞 子

納豆めせや納豆を

なにとて今朝はかくまでに

めします家の少なきか

せめて半も賣りなば

病になやむ母上の

笑みますみ顔みむものを。

あはれめしませ納豆を

今猶少し賣りなば

看護にはべる弟を

とく學ひやに送らむを

かく僅かなる賣料に

薬と糧とを如何にせむ。

富みある人の一時に

すつる黄金をもちなば

親と子三つの玉の緒を

いとやすらかにつなぎつい

柞のかげにおく霜も

袖のしづくもかはくべし。

手足もこぼる此の朝げ

わらはの上はともかくも

起き伏しかたき母上の

病の床やいかならむ

衣もうすき弟の

肌の寒さやいかならむ。

せめて男の子と生れなば

血しほと汗のしづくもて

母をなくさめ弟を

そだてむものをたてかぬる

煙よりなほいと細き

女の腕をいかにせむ。



父上世にもましまさば かくるなげきもあらざらむ  
まどふかたみの衣さへ 縞目もわかずやれはてい  
つくらぬ顔の色あせて 髪も心もみだるいよ。

昔さかわしその頃は 蜜に群かる蜂のごと

朝な夕なに集ひきて へつらひたりし人々の

たまさか途に逢ひぬるも 見しらぬ顔に過るなり。

人のこゝろは張りつめて 氷よりなほ冷やかに

浮世にすさぶ木枯は 我か家はかりたるふなり

涙の谷にしぶむ身を あはれすくはむ神もかな。

思ふ甲斐なきくり言に かへらぬ時を送りけり

母上または弟は ながきてあらむいさやとく

賣りつくさなん残りをは 納豆めせや納豆を。

柴舟曰 ひなれたる口つきなり

江風曰 やさしき調へに熱き涙をふくみたり

咀華曰 詩趣なしといへども坦々として筆を遣り、なほ且つ字句に熱情を

こむるところ、やさしき詩といふべし。吾人は此の可憐の納豆賣  
のために、一掬の涙を惜しまじ。

笠峰曰 われ平素、納豆賣の聲をきく、朝は最も悲しく、聞かざる朝、亦  
然り。これを讀みて思ひ當ること更に大なるものあり。



1,200

X  
0  
0

明治三十八年六月三十日印刷  
明治三十八年七月三日發行

（定價金貳拾五錢）

（郵稅四錢）

編輯人兼

東京市牛込區市谷田町二丁目三十番地

田部井柳太郎

印刷人

東京市麴町區紀尾井町三番地

中村貞臣

印刷所

東京市麴町區紀尾井町三番地

元真社

東京市牛込區市谷田町二丁目三十番地

發行所  
文友社



卷之四

文

文

文

卷之四

文

文

文

卷之四

文

文

文

卷之四

文

文

文

卷之四

文

文

文

卷之四

文

文

文

